清良記

十之十二

農商務省
圖書
和
第　一　號
共　冊

和書門
類 八
號 三二
函 一〇一
架 六九
冊 一五

内閣文庫
和書
號 八三一
函 一〇一
架 五
冊 一五

内閣文庫
番號 和 8315
冊數 15（5）
函號 151 126

和史
共十五

清良記巻第十目録

一 御庄兵庫頭か花御付土佐両山夜討之事
一 南方新助白木図書と喧嘩付清良西園寺殿ニ異見之事
一 西園寺公廣ト一條尊家ト合戦之事
一 清良能信ト加勢之事
一 出目川合戦之事
一 清良蔭木之城を攻落事
一 土居庄討之事
一 若手之衆川を不渡事
一 有間兵庫頭能住武略之事
一 桜井武蔵諸国物語之事

一櫻井文武之助討之事

清良記巻第十

御庄兵庫頭飛脚并土佐両山夜討之事

永禄九年二月末四日御庄勧修寺兵庫頭より黒瀬殿ニ早馬を立せて申けるハ豊後より兵船余多押渡り候に付て是へ寄らりと見て候へハさハなくして宿毛の内貝塚と云浦へ上り土佐備後中村へ打通りしか去年飛風其上海辺にて手痛く当られ候に付手總殺し土佐勢を一つに致して陸より攻寄候人との巧みと見えて候当国の大軍を集小勢を以防きなん事難成存候間早く用諾し勢を被差加へらるへしと云ふ是ニ西園寺殿旗本の武士を集手分を被仰付られ郡内の分者軍役三分一の武士を催候兵庫頭へ差添て御庄へつかハし

深田中黒斎藤木西の門の武士四五余騎ハ
土佐清良と探て河原渕へ差向ケ須山西ケ嶽
桃谷三ヶ所を堅として手向しけれハ各堀用之出張
して待といへとも敵て防戦をなさゝりけれハ談合
相退去し連歌なとして日を暮しける清良
ハ思案し思ひ患の末を尽し土劉の様子を
窺をんとふ是将士衣義秋の息義重一条殿への
忠廻として毎日寄堅廉将総も撲えて備へて
耶立首て退西寄て早勢僅々の者共所存を
なりけりして土居も定り小して三月九日と云義重其
後ハ陶り本居ハ所々より奥を去流し因窄た
りといひし八辞退も土劉まて又何事より堺目を
あんらかも談将出向ひを留て上山下山の武士

暇
其ハ何天し時分て出月六日の比より陶人し同八日
九日毎日なれから三日へ高人を食かとのやうにて
相見えと出て見立たり重清良出形勢を秀
君の時九月の日ハ上家の押下り土佐勢へ手つかひし
土家七八村放火さセ我身ハいつれも静りりて
清を望之兵人左無慮を近付夜ふ入るハ献木夜
討ふ寄セ来らんと覚申に是高人ハ急紀毎ら尓
所々にてつかりし西ケ方口とん谷口乃法まで
兄分も石を起し桟木を構ヘ又当日のうちハ
西之段所之賊居夜ふへ入れハ所々に篝火鏡を
足軽の者を付武士ハ皆待まし小備え清良ハ伊豫
名へ引あさり金死陣西の小山之ハ六郎兵衛を
置て土佐表之案内として土佐方より三方同時や

押寄てもとも欽乃けしからさる所さへ人あれハ安
こゝ候悪口をちらし居ちる所へ六郎吾清右を落し
ち候絶折セしかハ土佐者或人討とらるハ患も
なかり此方西の方口にてハ重宗左衛欽六人石に
討え二人吾口ハ岩ふ為る伝清く石牧木を落し
かけ七八人打伏せられハ欽同享發て嗚呼声家れ
陣を欽之甚後欽方上山落る処つハ途地嶮く追ち
葉さハ壱人も居さりけり大義適正地ともて石さて
討し首を上ふんとて松明ふりたてかゝりけれハ
夜の事ゆへ者をてあそて夜のふけてふせぎ者
とも五六十人卯く南深田中野乃兵を川津へ追
至を石級打かけ候絶さて振を人ほて打え関を
揚て見引たりける清良無欽の変化をさとり

方術を以て是事只祀る不労十二日掛ふと鳴しりハ
各洞津しくりけり

南方新助台木図書と喧嘩付清良西園寺家を
異見之事

去程に其後黒瀬家にて夜遊びの祭の事詠将
各退却しけるに白木図書と南方新助の茅屋に近く
却く久發武甚さ伝居ける所に毎人の小者一度に来り
己か主人を見遣りや首ゝん左右に入替りて茅屋を
直しまふを為書短氣なる者なれハ遅かりしときく
よつさ呼び新助の小者市助といふ者を抛者ちりと
心得く以てそのふんを市助是ハ狼藉なる諸人
の中にて恥さ及ふ然る主人になる手むかひハ
成ち難けれハ名代にせんとて為書の小者夫八と

ヨハ弥津を堅ふして土佐の押とを命欽引

云者乃仄を失遁させ七ッ八ッつけさ海をそそて仍り
天ハ之を不悚して御指を掻りを命明かなりと云
倫く仔細指を集め当昌書ヶ若黨ものがさしと
指をいつきハ新明ヶ下人共も不斜掻く切腹ふさき
主挑腕も踏消しをくらさハくろし歎味方忘れさらし
ハ實打手打合く手負あまたの未たき中死せる者無
なりしかハ元より昌書ハ西園寺殿縁者なれ無く黒
瀬殿と申せし者是を呼とき乃お東方ゟこれ者
左十七八人手負を負せし事を各お合致方を引分
死人ともあれハ追て詮議あるへしとて其夜
新明ハ希肴ゟして東方へこそ帰りける其後昌書
方撃而一味し此傍闕ゟくれハ東方へ揮寄せんと
きくらめき公廣ゟ人具よしきを中ゟ黒瀬殿呼び

人小ハ尓まゟ人

唯今久枝も為ち能る可有之依と存し候是非堪
忍せまし纔と罷躁く給ふハ先主根元を呼扇ふる
へしとて親安へ使をもつて合依新明ハ大勢攻来ると呼て
用心し黒瀬殿より使乃者も門内へ不入差留めて
居らるるよし使帰つて云しかハ黒瀬殿大きに腹
立しさらハ武士を集めよとて我らも歸るへ觸られける
時日も不移八方より馳集りて黒瀬の勢ハ四方ハ猪麻
竹葦の如く立並ひ打立んと闘ふる清良ちう
まさ急き秋宣治法を招きて衿をも東方を見せ討
と云ふ卒人小寺ハ難え聊居罷し在る十有廿日も
無りゆへしさきハ土佐其後河州乃三好も此須ハ
手遣ひし南海をうつかふよし呼くし親安を討
ぬるを歎ゟ小呼せよ貴子守らく三方より大歎責来らハ

先親安を捨置て大敵を防んとせハ親安ハ敵と一味
して城をうかゝん時ハ味方の大事有へし若又
今般の事ニて親安を出さるへき事ハいハす名ハ
如何と思召ハ我とあれハ当人呼寄て極メ之とて石広ゝ
一具内を委細ニ申聞けれハよつて終ニハ名ともかくも
ありけれハよりと退し申へ南方へハ清良を始方へハ
治方の様子て無事石和睦ありし比様子さく彼方武
と廿日ありしきハ土佐より目付や人をきゝけん
又河原渕法忠より陣ヶ森へ取来り岩木ノ城外の
森二ヶ所の塀を攻落し宗良深田中平へ手分して
山森と呼て取掛ル有けれ共無勢に不叶故より
已ニ領内へ乱入気色不

西園寺公広口一條尊家口合戦之事

土佐一条兼家にも此件の事を聞て俄の出陣成れハ
始ハ小勢にて跡より追々馳集り既ニ八百騎とそ聞へ
ける兼家ハ宝山を本陣として軍勢の手分有けると
聞え先一の森へハ土佐式部大輔清良を大将として
白木赤浜山田の武士を始久保郡合弐百五十騎にて二
の森へ能向ふ二の森へハ有岡安庫頭を大将として
皆田田野熊前の武士百騎に家藤監物を差添へ
都合弐百騎の勢を率し大内裏浜へ打向けれハ
土佐勢も城を堅固して清諸の方へそ向ふ清良
敵を追ふて先を取らし土居左衛門佐を五十余騎の兵を
先係有岡安庫頭の手へハ先是ハ有間の清右衛門
高森ハ土居の清右衛門一の森ハ小川を隔て先七八丁
有里有田と高森への峯手と戦て宮の道近

濱松の課の森へ土佐勢ハあつまりて一手ニ時是信へ廻り
土居を一の森への苦手ニ残を合せんと時信より押懸る
へしと然らハ構中よりも突て出へしとの手分を定め給
ハ南の方へ是も五百騎にて差向ける右京ハ五十騎
にて吉浦村中へ打出作の後より押寄せ旗本の相
図を待有間兵庫頭高森の麓にてひそかに矢合を
志といへとも敵ハ山内外記安芸左京とて功者なれ
ハ清良も押静て時刻を見合を旗本百騎にて一の
森の方構の西の谷よりかゝく合例の土居の軍にて捲
さ疑絶ず交ず立く突懸りきれハ安芸山内少く討れ
てされて引退所陣屋を爲に乞て待ちけ寛元
ぬ者先立て防戦ふ其隙に毎将東西へ開き土居
を中に取籠て我討とらんと揉ニ打も土居勢後
へのかんとハ思ひもよらて萬て手分しける土居勢
相図遣ひしかハ能家を出遣くして寺内ニ欲ハ掴し
く大勢にて清良を引包既ニ危く見へつけれされ
とも旗本ニ一人當千の者とも命を塵芥よりも軽く
一死一生と定大将うてせしと鋒より火を出し覺を
せんと戦欲の大将安芸山内を目ニかけ討死せんと
思切四角八方ニ打て出りしか小の方を打破って後へ
後へと抜行をを欲きおひ懸り小の山際へ押詰て
うこんとを清良と思ひてたゆまハ叶ましと思ひ山
きはより馬の頭を引出し取てかへす大勢の中へ切て
入りけ者ともと下知して薬直に撒立し兵二兵三
ニ打てかゝれハ其の勢ニ無暇して土佐勢又川端
を追り一さまて所へ右京ら皆御東西より一文字

さ突かゝり散々ニ戦ふ八ツ頃ハ卯月初ツ起しくこねかへし
たる田の中へ敵味方乱入泥さ海ふれ水にもせ深田に
足を踏込或ハ足つかれ倒れ味方の勢ニ踏殺されて
死るも有心ハ猛く勇めとも足場悪ハれハたちかねて
たゝかれ助けよと泥者死ともれ救人とてもなく
不叶網にかゝれる魚のことく誅く鑓ハれし出て突ニ
ゝ後土居左京亮敵の追ふを□きたる所を待受て討
相戦ふといへハ遥ニ遠く扣へし味方の内より井を見て
鞭を揚を合せおくきをさせて馳付五千余騎攻広く
と二重ニ立て候絶ず多勢を入替て扱せ
こそたゝかひけるかかくて乃水もまき溺死の
足掛を取られ追風ニ吹かれ田地水をあふれ
もしきられ突立おくれハ水網に嘲面を

向城より様子をみるに南の山際へ廻り入つゝ却てさゝへ
引二時計悪戦して敵味方労れしかハ互ニ息
をそ継きけるか城中よりハ休林院茂足を力ニし
木戸を開き切て出荒手の兵を向けきたれハ山内
に追まくられしかハ味方ハ崩されハ左京亮
又来て横槍をの連も兵衛督右京亮土居休林院
等五方より突切て山内ハ休林院ニ遠ざけても
く追立て一町余押くつしてを兵衛督又横合さ
御る甚分ハ皆安兵を目かけ息を継きて接戦
て安兵も山内ハ叶ハ不叶とや思ひけん東をさして
引かへし土居勢ハ敵の逃るを襲ひ追詰て討ハ敵
又かつ一合とも防戦ひ引組て死るもあり
首をとてかゝれる敵味方思ひ心も時の運に任せ

勝貞を失ひ討死しける者多かりけり安芸山内ハ追付
敵を追拂ひ小坂の東より五本松まて引取ける所へ土居
か郎等ニ赤口次郎左衛門と名乗る安芸を目かけ只一文字
ニ責掛て組んと欲ス安芸か家の子ニ重助と云剛の者主の
あやうきを見て赤口ニ立むかひて戦けるを但重助
ハきつて出る太刀ニ赤口心ハ武しといへとも重助か下に
押ふせられ既にうたるへかりしを知りて赤口か郎等向
次郎左衛門一さんにのりかけ馬よりおりて飛かゝり
上なる重助か首をうちおとし見て引倒し内甲をつけ
さ腹に二刀さし貫き重助を押伏首を取て指上しハ
赤口ハ郎等ニ助られ赤口の命を遁大息はいて汗押
拭ひしに安芸か兵とも余人返し合赤口兄弟を見
つけて我討とらんとひしめきしを土居か若人廿騎

きたりかけ合せて安芸か勢を追拂赤口兄弟をたすけ
けり蔭木の城竹の森の土佐者ハ味方敗北すると見て
おり合せ川端前に留て踏とゝまり清良ハ小坂の峰に陣
取ける所へ敵等とめて軍中破れハ信を見捨士卒
を集て相戦る討死首を集めさせ給へハ首数
合て百五つ記しける此時に清良の軍散りしかハ
勝鬨揚つゝ帰らせ給ふを清良鉄砲を覚ゆる
軍法を遣しけれハ若干の兵を討とらるゝ
土居か水銀者も修理を討死しけれハ無念可
まて見てけれとも味方の人数を考るに竹林院
をはしめ都合八人加勢百餘の内にて九人土居の手に
四十九人合百二十六人そのハ討死しけり

清良能任へ加勢之事

高森の城主は堀の山に在りて居りけれハ兵庫
以も待ちて日を重ね暮しけるか遂に城を
取通せハ寅の刻ゟ討入しけは清良も急ぎ
取に追散させて荒川の砦大勢にて討ちかゝり
陣へ帰りけるに合戦を待ち見へけれハ夜更の事
取る晩方には又一の森へ押寄ける処へ味林院
寺土居郷水か旗を見て立直し東の郷を責けれ
さらハ其山より引くと遠くへ出て来る勢の
事くなし兵庫へ加勢として敵を取込て居けれハ
左右ゟ三百余騎にて打通りける処に間
の人数を加へ手分して三方より責入けれ清良
小坂口に至りけれハ此の大将能く防き戦けれ
其の又同勢屋本表へ来て取の進を新に

しけるに也此とき不二鐘擬にて相不のに陣を
出して居けれは兵庫以か敵よりの夜討
を案じて一人も不透候用心をきひしく守居る
彦本表の敵ハ清良よりの夜討を気づかひ土居
城へ引く又旗本ハ陣の森へ入て居けれは明日を待て
清良郷へ廣り浜松の敵にかゝり加軍兵共ハ其中
少く其ふかくしけりへつりといひ居けるハ清良の心えく
家後左右を固め責寄せハ軍手負多く
東の方ハ明て敵の引所を構へて返し落を夜明なり
敵の同勢向へきて夜中に清進して公廣を見
へ清よりの郷兵れを土佐の同勢ハ公廣の旗本
へゆへつる人そとり押寄堀の山の砦を固知附
押寄して吹朝よりかゝり水をのみて

草刈名ヶ谷ゟ退ハ柏田ニまて起川まゝりへ
追返て切所ニよりて八方へ乃る有る兵庫頭ハ小の
山へより横合ニ懸つて打崩せハ荒木城の麓へ
追て日暮を待して苫家の人ハ湯浅の南ニ旗立
させ先手ハ川より西ニあり備へ候

出目川合戦之事

翌て四月朔日ニハ苫家の湯浅ニ陣を取て追
しかは大膳ハ小佐城ニ陣を出居有るハ前の
ごとく柏田ニ乙て横へ廻り其間十町斗ニて
勝負しけり苫家ハいかゞ思ひけん居ニ乃退ハ
又陣か森へ引退て廿月二日ニハ大膳か未明ニ
湯浅へ押寄荒木城へハ出居り本の森へハ有る
積兵りて押へけれハ大膳湯浅ニて手合し

中野探田皆同国野ハ一番白木赤浜家蔵山国
ハ二番旗本ハ三番ニ定め先手四頭市越の押
寄るハ苫家方佐竹信濃三百余騎ニて岸
より乗を遮乃西へ出るを見ひもより出方より
責かゝり押ふ候しけれハ佐竹勢一気まくりを
たまり得ず先手悪く敗れ先二乃備ニ退て敗残
戦しゝ左佐方より二北ニ多来不残押かゝり信濃
か勢と一ツニ成頭とゝれ五百余騎ニ煙立て
きかひりて退ハ倍手ニりて又退き陣へ退きしも又す
旗本へ崩かゝる旗本の三百余騎大膳自身ハ採幣
さて川越ゆ擲り火出ツ斗ニ戦ひ大佐勢一町斗
押倍け以数敷ニ討て責戻あてしまし崩て
土佐より強津并蔵三の手寄りかゝりかゝる

又旗本にて先を進ミ荒手を以て廣純方
なくして先手の岡豊深田中野皆田を抜て旗本
の勢ハ川端まて引退く鶴津ハ前後実てかゝる
小勢なれハ両巻て討んと控立し攻られハ
信濃守小勢ハ勢又むかひ伊与勢を追拂ふ
兵庫ハ旗本より間を隔くつ二町手を分てまて
土佐勢をはさみてかゝりし其外川より跡美軍しく
居るも家人香宗我部親泰越前守と津川より渡りて
突かゝる伊与勢も漸々すしして藤木川まて退き
しを藤木川を跡人数引出し段々差し先之人を
討す有る所に吉良式部少輔を合してかゝく
城をすてゝかけ合を岸の陰より渡陸絶すを
兵庫の旗本ハ矢悪しく横合さて大山崩し可申と

使ひ立たれハ手をいて突かゝる毎勢横鑓をかける
ところに敵大勢なれハ是を事とせす其場廣
けれハ右左之勢を分て伊与勢を引包し深く攻め
人数をたれハ以て清良ハ得たり信濃香木重宗
香宗我部親泰一つに組て四方条强香宗我部の旗本を
目かけ左右一手に寄せて西を攻めす突かゝれハ土佐
勢是ま崩退きつていつも川まて押へきて西
堤より是残見て土佐の者二百余人ホるを討
いまゝ討て紛右清元の手合るれハ土居有て
取てかへし又端へ退出して其間土佐勢息を
休め又川を渡り突て敵戦ふ敵大勢にて押かけ
群来連ハ伊与勢おされ一寸三町ほと退て崩へ
宮和より南方多田法兵津土居条陽て馳来

此形勢を見て少しも危ぶまず荒手をもつて攻
戦へば土佐勢は敗れて陣を乱すべし今日の軍は
山くずれて土佐勢を百五十二人討取る伊予方と
弐百三拾人討死すれば土佐方には名ある者の軍は勝
ちたりといへども伊予方は若干の人数は討死すれども
軍の勝負は始終伊予方にて利運を得て陣を乱し退去
きし上は伊予方の勝なりとぞ後まで申しけり
なれども後人批判して勝負を決せざるやうに申す也
とぞ

清良落木札城を攻落す事

既に二月の末になれば清良は家の子を近付今此
城を攻落さんと思ひしかども公広小勢にて当家
を防ぎ候事無覚束て延引す今は南方多因

法華津を始加りければ当家此陣の後詰せられん
とて此陣騒ぎ時の寄手責落しかば是も寄手は退き
けり去る程に敵味方の兵共一生の晴なりといふとも
らんと各奮気を励れける程人すくなに出明日まで
に土佐方の因勢は是より退の西に籠り此城を我
領内のごとく思ひ心安く玉葉無かりけるさるに無く
は鶴王丸の中に覚えければ朝城より打出けれる
所に夜にいりて浅田番掛飾を丸山九人にて
ぬへは只今夜中に竊に搦手は清家押て旗の所を
待早旦に乗入りて何の造作もなくましきと存ける
桜井はいかに思ひけん中にあれば桜井申て尤然
なりとては去る程に公広名は城を後詰の間に大
勢にて取切陣を張らせましませば城の者共のかれ

かくて思ひ一命を不惜戦ひ切て防きし所左
衛門を味方の勢若干討れ此の者也唯水
手を見毎をて此様三日之ハ城中へ移りせ秘ら
ハ味方の勢弥失ハ後して城ハ落て十五歩と云
左右衛門て此華かさらを変りて以つ目昭介の
軍毎々共子味方勝ことハ存定在共殊の分
気を陰もて讃らきぬ軍之折節幸風絶くゝへ
ハ此陣を無理攻に城とを責落し敵味方十賊
させ中度事之以二其上清良の作候文の抹
まて其宗安氏の内とハ中なつり此様を敵かもで
く其道其事土居家の私尋ハ土佐方に海を送りて
口樽河野京町小陣一ツモ味方案内能知
なりしそ便関をて見てかれば平責に攻くく

乞けるにこらん言ふ地ハよろ敵つきれとさる時さ
よくいひきれハ皆共俄まて同しからさ行しハ其
立者ともて夜の内に窺ふ城の色り見方の模様
へ思ひより明けるを待て来明き塀を乗越く城
中へ乱れ入しかハ城中周章騒き防き戦ふ由
いつも敵より味方ハ案内知りたる者なれ共頓てつき
雪しも移りしこそ押付し暫時に城をを乗取敵
数多討ちれ土居方まて此様ハ見れへしかるまこて
一度に関を吐て揚追ハ敵味方の軍勢城を目を
そ覚えしけれ討取首数九十六西園寺殿の旗本へ
実検しけれハ存しよろこさる喜ひ何よりも悦入小隊
子と朝の手際を取見物まて山との追事之端より
折しもさきてくる其の日をまつそこ後の荻つけ末

藤子跳洄しけるをさらし出し諸手へ討ち首
二十五人ぞ梅田殿は本の如く三河守重宗ぞ預りき
ひらく望めて差しおきぬ

土居夜討之事

公広尊敬いつも手勢し此度は先に心を励し前後
の安否此時にあるを思ひ定龍虎の勢ひを争ひて
陣を張られしが此暁より東風殺気吹きて砂を巻き
木を折雨は篠を突がごとく降りければ敵方是に此御
し戦争も難成ぞ家の陣は少々出て大方警陣を
張りしかバいよいよ風雨を凌ぎ給ひて西園寺方よりは上揚
一の森高森降去り泰氏四ケの陣へ引き又宮に残る者
とりどり清良は篠本城の様して諸櫓にて緒
りぬ陣を泰き遂に見やりは卑の刻斗りも諸卒

雨に濡し居たりける暮に及びいろめき立たる様子
ありけれバ西園寺家城之人引入りけるを見て土居家も次郎丸
の土居家之人々ありける者共今之是非を捨て打出せよ
とて猶予なく勝ぎしたる者三百余人撰出して六手に
分け相印には白手巾を鉢巻にしてまだよるよし分して
立ちくるまでに二手は中村川へ向ひ南の麓に待つ二手は
東より一番まで西よりの相図を待ち一手は市越
まで竹の森より切立合ん用を討てまて前鹿丹波か
秘密の夜討を主として掛け行きて近付くらん
と思ふ時旗を鉢巻西の一手山下に向ひて鬨をつくる
突かかれバ陣の森よりは黒煙小人数三百人斗有りしが
方々ひろがりて周章ふためく中にも少兵を志まる
者は西の方敵向ひ来ぬとて防がんとする者は東より黒

二手押入らんとせしに切伏突伏追ちらされ南をさして
野山にかけれともいまた追てゝ標を抜し逼つとする可の川
するをも楯を捨荒の二乃手請取る小橋にて討ことなりける家
の旗本より是を喚て無体に助人とし乃れども中之川
の小川水増さりて一人も渡り得ずに川むかひより跳躍を
して喚呼とひろども風雨川音にまけ聲も聞え其聲
もきこへず一条家の足軽大将和田小塚島田國沢
桑名井沢是等をむね河侯吾是栗本なといふ侍を
討取雑兵合せて百二十一の首を取て西園寺殿へ捧け上れ
ハ大に悦喜ましく毎度寄りて清良ハ茶代なりとき
是らの人々諸手勲の大将数多討捕し其外比類なき手柄之
て西園寺家の秘蔵せしと云し行平の太刀同左文字
の継光并豫是なりといへて鳥月毛といふ馬に鞍置き

鉄炮廿挺究竟の者を見ハ菊生の寝覚盛長の本
是之より返して又實光によりて其賞を賜へしとの
事なれハ面目地の覚不浅さまして其之東方大和
守中にハ清良ハ荒高の揃され西園寺家の重代
ふも猿を莫耶と云名をもつ鉄又をかけさせ人之
新助にとらせよとて息もつかずいさ得之八士
居丸の居りて両手陣ヶ森へよせまいて東方をん
陣すへく八百余騎雨をもいとはず鞭鐙を合せ
ひしくと責寄を陣をそて取てかかる

若手衆川を不被事

かくて四日五日打續雨風野原ハ皆海のことく成りにけれハ
敵味方共に軍もせぬれなつて懸戦て居たり
しか若森いくさあれなん六日の暁下家地へ引入

従外安重ハ僅千余の山家地次山にて交名ハ広
論大将を集めけれ共陣ハ土佐方へ見下ろし行
の森を後陣とし先ヅ足利へ寄を評定ありけれハ
兵船手に寄らるゝ若侍我等ハ参陣仕らんと両
に分れし者あひ重ね為を以て陣ハ首ニ兵庫以揮ヘ
ことさしハうちも立ちまさる浜辺に於て少の時ハ
島ことごとく押寄せ陣を構えける所へ軽くして攻来
将も兵が手よりて我殺日も為し陣まり居たり
ふるひあへる事もなしと以て誰敵兵皇の方へ攻し市
又続きとて敵攻めの為しとして先兵庫陣所に敵成
少しかしとて叶ひ難き兄若千を伝へりし子孫びきハ
而して兵庫ハ湊ろ御手法花津南方山田村中に
ハ兵が我横宛を奪ふ攻らるべく以て為せバ

統ニ召集せられつしと異見を述べられたる者咄を
入るゝ西國寺殿を始め小姓等ハ三瀬宴明石章印
因を為白木為書等を以上八十騎ハ二の手皆田熊崇
横山へ向ふ騎ハ二の手と定め紀合を取合ふ事に前
後を為す事時子押寄る川端に打重なり出る騎
発水揺してゆるゝ程経過ゆき瀬も見へざる
を見て一度用ひ為けれバ気げ々として見て行く
て上ると見る者も三瀬白木明石と武士の理の
少と共ので渡さんとしける足軽今七十人河水
の瀬をさかまく流れに押流され浮み沈みし
恐ろしき城中より見下ろし一度に咄と笑ひし
ハ昔ゝ為て見へず当隊流し者共ハ濡たる風の
来しる為て如何なる敵つきつて寄りし下の

河へおひ入らるゝ事しけれハ華をりて川水とゝまりく
さゝへ其比紫手く兼るさ川端に至る処しさる
かゝ引て出しされねハ其ハ渡を渉し叶ふともさ
いつれも水深ければさ気なう川北へ下ゆく小千餘
兄若しかるも中々いうへくもなし其後なか
減しけれハ三戸引ぬる其見えしか三浦
し三方より挟み木比根等と取る我をも
責かゝりれ共此城の後屏風をさつ成りく
なる子石此木段落し出しく者ある家男矢にわ
に立る兵人そ討とりて若く進ん共にと事もにも山ある
りく将へ引ん共され共自由ならぬも只中流に
して船に離れ有者の扶きもなし河童さ海と
元清諸将兄弟て出らん共しまれ共元来

織盤の争しある御郷の中にも心は悩く成るへく共君
時を失へ者入かくくそ成さぬかる

有馬兵庫頭鎮信武略之事

去程に諸将を呼ひ何とて尽し思ひさる事なかり難
いふへし楠正成の楠の謀あり吉野の楠も如くや
覚え申候事も其しかうし候に有馬兵庫頭鎮
信了て攻落は候はね無勢なる諸手要害堅固
御座候ハ日本不及兄今さへ恐しきを案する所ハ是
大勢なれハ是非も近く地の利有るれハ人数ハ鎮
信に廿一面目をもうしたる尾し者とも申さハ
味方利を失ひてうけれしを恨みに候へく
とい覧全く さやうにてハ此の程を考ふかに角て
有関の子にハ八まハ土佐勢を今手欲地を取ると

中にも右ハ此挙一の争を清く良過正なる人を集め修
者に仍せらる想陣ハ深引自説せしかつしや仍
ろそ仍らくえんとりんと中れ色ハさらハ見て徳率
取集色公広にて土居為昔執職へひらき色ハ至させて
一ヶ月延て四月十一日に銚代清良未後して川原御
法忠の秘策をたまひ皆より謀書を以て出き
にも見状伏す云
今度不慮に軍の利を失ひ当家公よりは立称不深
子孫家把子此陣を手播は公広へ難為引土居中
里先方ハ陣の妻子抱へより里于急ハ只土居一人
子の為に向後毎夜にて見合せ抱討を急かく
下并策鉄丈を撤よりて見合を打為居り款淵
籏なれ待請て彼討為に法忠たれ今度ハ宜二の些依

方よりて既敵之萬事に油断なく為敢者之仍て御
軍田持堅め為器武勇敵に法忠判とさらに協の
中にて法の少しも協同の者まてを抜えし遅の
極なるもしさハ協力して心にも不意の進軍あて
自滅を志して日の暮を待ちてそろそろ来るまれ如く
それハ夜に入て深く時刻よりしと用意し土居方
より夜討に押よせ来るを陣の妻を焼捨てて落
市越芝永野市進み永の方へ進みよりして風情に土
居の人世清良とと勢とひ中堅きハ為りしことを
為りて焼しまて出仍の者れとの名の名字を名宗
て追かけて薦木の海の辺まて追詰同士軍して
あそびれも業のこく平田為る者を立の支架を
遣つしと為余人引具し協中分打て勢為方へ兼

と云ひしを待受し事なれハ宇田の家を押へ中より
起し鉄砲を見済して撒兵隊攻鉄砲付てこれより
それを見ひもよらすありしかハ士兵中頭も進し
合を三方より見立てヽ一人をくさしと引包て六十余
人を討取りて其ほとりハ彼の森へ乗入りてそれ
より撒兵中ハ總十人斗り残兵をも何の造作も
なく物を取して乗とり額をして村落々々に押
士兵勢ハ方々へ落行者を追撃し討取りし西
諸手の首数を改めけるに首二十七首男兵隊
以同四十七士兵式部大輔同九人理兵兵部太郎合
九十三と首帳に記し又西園寺殿へ実検に入り
四ツ時十二時頃迄の森の撒兵首の
兵を籠置捕して守兵と陣引揚り陶軍

散して後ハ此日の戦ひに討死し武士等の叢夜
の田の畔くさ首も斬られ敵味方の死體或ハ太刀を手に
握なから抑へ伏つゝ死たるも有或ハ方を棒て
備ふ者て死たるも有眼白をむきし者も有頭髪を
乱てる者盛を振ひし大将もそれとハしられさる者
の露と消えし者名斗ハ残れど死骸ハ道路の土と
なり又放されし者ハ是なくして野沢の水にあはれ
なりし理飼となる近在の者共ハ具足甲を剥ぎて太刀
を捨ひ取死骸を山谷に投込捨て置しに所々に己の
掠し往来よりも少き者も多く文字世の変易を見し者あ
てありし繰る者も多かりし戦國武士の習ひとは云
なからしかも野山に死骸を曝し大鳥の餌食となりて一遍
の回向をも受す有も斯く悲しき果にハ成勢も世の無常味

世にては俊羽の巻に述んとする作者の哀れとぞ云
つぎいさんゆくそなる紀

桜井武蔵諸國物語の事

清良公時九十一歳の時より仕始まりに趣くるまゝ若将
なる道々大敵度の軍に大敵を靡け数千の敵を討取
ことえまりの自勝の心なく他を害我を誇るまじの為
り勝負の批判をせまじき此度の軍を為度なくの勝
くまことに危き働にて当に前られ継て遂強く
命冥加にて敵を捻倒して首を討り遁たるは不思儀
なる道は他より是を評判せば称し此事之いかなる花
者と桜井武蔵に語られければ武蔵聞てされば御
君は常に申し候しお従ふ兵者同年同時の旗にて
度々大敵を退けたる名を遂て手柄を顕し一度なる

不覚をとらざる者は勝誇る心なく勇を顕し大軍を見ても不恐
只敵に気をくらぶるもの故には勝ぬる也と心得ゆへ覚つかなき
其勇者は不恐知者は不惑と申せば一度も不覚を取らず
是武義にして百度勝ても臆せざる気を定めらるべし
御申せば其良将にて聡明たる備へ仁義の勇を立て
誉ることを是に以て君十五歳にて石城没落の時に親
父清晴公討死の時土佐へ浪人なされて家臣伊予国にて
其の三年程手を尽くされ一度も大将として軍なし
と雖も其家来武義に勇られて十八歳より国をも
取しかり四十一歳にして一筋金を打出し当国西光
寺の城に仕えし何の役にも立ざる者を君は御情にて
てお召出され家老に申し付けられ剰へ御譜代同前に
其の恩を請るる人にて其恩冥加に叶加之去年より病身

ゐ平愈仕候ニ付て右之武藏ヲ殺来ては此妻ね之
八何方へ参り候ん行方を知候まて殺致し様にと此ま意ニて候
へ之れ策ヲ之神の志ニ申候まてニて日延致し候来ハ
各別さもなく八組下ヲ語らんと拓人来り之此れ君
を志して何分へ来申つき摩利支天八幡日照の大
之内国家をハ殊の外繁昌と申立ては是ニて済ム集
十四歳より四十一歳迄て廿四年の間信国を見申又
平ニ功名見事ニ語られ山家に生え越後の輝虎八
知年より人ある人なり之申せし十四歳にて信父と戦
自分操弊取て軍に勝たまでより戦ハ家得者の様に
思ひまて之なれ其未人情ニ生き付まて諸事さし
と云ニ以信玄始終の勝負を不考中々子極ちに
之なれ之勝事よ多分不及悔し厚事なれ速人さ

然ハ名将とハ申難き事ニ候又甲州武田信玄
ハ輝虎とハ一際かはり志倍して大将之上家中
に能武士数多有て軍立手なみ見る之人之又信虎
へ不孝婦撃之川家の乱を蒙之事之勝利に存
家督を取て甲斐てまて何も之将ニ立ハ末績
し給へ之功名之父の申ハ織田信長而防ぐ
蔓出之ハ信玄之れ旗を得様に人之敵の活中
中ニ以つきれ是ハ荒き事ニ付て諸事に早合点
ニて底知剣術不知慈悲ある之者ハ織経紙
者有りて機嫌悪敷時ハ殺之ニて佛神
之れ不敬也之破り之云之れハ欲
深く人を能見知り後に勿之
考えハ見極らる之定規将之と功

志なん批判にハ安藝の毛利家ハ古代之
如き所領を安堵の事なれバ阿波の三好
長張ハ別て政法之事ニ付ても四国の地ハ悉く
く大軍を引受て公命を随ハず事由名大将
能なり兼速以て取及ハ不尽上意ハ大守ハ至て信ず
又思ひなりし事其外之場所ハ至て社之所法
此へは去年公方義輝公を討て天下の罪人なれバ
然るに今此義ハ是迄の君臣の順は君によらし
然るに今ハ近江の浅井備前守ハ従来君を
如く家並国の思ひ事なしと事なくてハ其つよ
ここ迄ハつよく小人の義にてハ左様の事なしとハいへ共
又難来なれハ文武二道兼備りハ危き事
為しと中傳ていふ中為く法田花梅岸三ノ和尚

来臨ありて正之筆削

櫻井文武之沙汰之事

かくて三和尚ともいふべき程之物語ありし時櫻井
事話合ハ一敷遁者ニ成てハ彼者雑ひし事を早
先清良の仕合ニハ三病ニいでゝ中ニ西国之家
於張又河野土居なとの扶持ハ当方数者ニてハ
然ハ其上西国寺ハ某事病気とも本復いたし
昔於武藝ニ生て今ハ天ハ何方へも参候ハて
心得せずして仕清良より遁ときハいへんとの事ニて
此ときハ一度某雑儀にて何れ国ヘも立たき旨
清良の扶持ニて命を繋きし恩我擬てハ絶
日本を見ゆる事なくとも二度出居家を立事有益
と誓言ありて中ハ神妙之至り志義感入ハ如何ニ

重宝仁なれハ随分情有之諸事を其談義
とあれハ情良なる中ゆへあるを仁の道とし第一切志
さて世間広く推の源しえて中に付る者に
ハ異見をも乞ふるとも武道の沙汰を尽くして中
前へ名を出さて心中にはとやかくとなし三和尚相
ハよき所へ氣をてハ似合ぬ儒の武道咄を好むや
ようなる武士の慣習佛道以て一致ならハとて不望
あるは武藝修道しられぬもの是非にとあれハ桜井
中なるハ真の儒学切なる人ハ多くれ阿波文なけれハ人
なき某ハ争しきゆくて人の中せしを承候て中也
俗事よりハ文武ハ車の両輪鳥の両翼のごとくに
難かたへハ別ちして別なるにあらん先の時の人軍出陣
されたしと申さうしんで我等寄なる事斗早く

合点しかね教導なる所ハ古人の語をもまたしき諸
手戦意ゆ往古之ハけなるを存る振るし長剣を
横さし兵法弓馬にやすく得てなるを武と心得
文と云ハ手を遣ふ小書詩哥仁や志し花は大なる
風流なるものよとするより心得しハ大成誤りと
存候え未文武ハ二徳にして天地の道化之故に文
武文ハ花咲て実なる如くに文武文ハ実なる
といへとも味なきものなり陰ハ陽の根陽ハ陰の根
となるごとく文武も陰陽之天下国家治りて武栄
ゑ為五倫の乃不遠を文と申天命をも不知し
て文道に背し者を刑罰し或ハ軍を起し謀を
なして天下一統に治るを武と申事にあれハ
戈を止と書て武と讀とハ文道を揮広めん

者の武道武官を統れハ進ん為の文道故に文武
ハ一躰なり二に別て統大将とハ不申ハ春夏ハ陽
秋冬ハ陰なる道ハ二筆なくして是別なる道を元
来一元筆の流れ之文武是等し文ハ仁道武ハ
義道の是之仁義の徳を統悟る道ハ文武の沙汰
なれ之を明なりゆへに仁義の徳別備る仁ハ背
くなる文義に背く武ハ俱に非なる道ハ文武ともハ
共にくしさるによつて未ぶ遊あるに障多
し礼楽書数ハ藝にして文徒の技並射御
ハ兵法の藝にして武徒の技並なり二なる根
本の徳をもとに一にして勤学ひ技並此藝を用
ニにして勇諫なる道ハ文武合一成是をもつて実
の文武と申ハ統るを読書なるを文と為剣術

弐武と心得るハ其技並を揚て其根本を失ふなり
文武兼備りたるを文武二道の良将と申読書
を統るハ儒者なる人統書なすもの皆藝者
兵法剣術をよくするハ武偏剣の兵なりとて
是又技並の藝者にてハ未なりけれハしかして
知るハ聖学にて知るハ賢何事にもその為になす智
馴されハ好むもの俗語ふるまん事より別よとに中
なく心に技藝好むときハ道ともなりて別ある道ハ自
ら功つもりて場能ある名もあらはれのなにそは技並
半余國を中に掲け此風俗なりてそ宗心学
如くされハ当時同し都ハ主様の地なりて天下
太平なる根本の地なる者ハ治る時ハ父をもつく
ものハ謂は叶ひ高毎夜東風流なる教なる

りゆへに其近国までも其風移り人乃心柔和にて修
文の枝葉よりかさるを好むもの多く武を
遠く文に近つきしより武ハ弱きやうに成行しゆへかく
の如く同合其国ハ都を離れて政府遠きか
たくて端々ハ其法を背く道絶るより其武を
以て己を静かんか為に数多の弓箭に携り人の心
武く勇猛武の枝葉の武芸を好むもの多く
自ら強きを中に伝しけれハかくの如く相済両家を
て初年兄弟進に力不足を補習ハ也武弓鉄砲をも
兵法剣術馬芸等を細かに意を剣させ是を
鍛ふるによりて筋骨たくましく力強く成
る他家に秀でたるに十四五歳よりして戦場を
踏敵を討ち事を常に撰ぶよりて是ふるより

成長してハ弥剛兵と成て数ヶ度の高名を顕す
ハ皆若年より剣を好む之総きもの其内に丈夫勤の
有る志ハ上手の誉きけ成りしくしハ云迄ハ常毎
丈夫と学とするにより目下に出ては此程瀬戸合戦
に於山内安全を致させしハ在名高手柄なし
き故へまてハわすや其基若年よりも国々廻見仕かへ
こそ是ハ合戦にて又中にハ張援の水をしまき鉄
砲も漏しあらん水筒扣用ひ渇を凌ぐ中便
法是毎日々よりて至宝として中にハかやうの類も
軍法を慮成候へハ人丈貴きを詮事も有其の
ことかへしもいつきも若くして其功の志知る
斗の両ゆへ法として依意よくして弥諸国まで
ハ皆是軍法計策と申ハ工夫を知るより出る事

また小田原北条氏康は河越にて夜軍を謀りて
勝ちたまひし事我黒きと日本にて大名の数に入る
また伊勢宗瑞謀をめぐらす計なきにあらず又
其心治むることによりつゝしみつゝしむ歌に悔て
十ともあてはへいは是は文武両道の道の如く和合し
て歌の本意をもてあそぶを謀とは申しましたが武
功ある人は定めて徳々の事なりとも古首之と存候と
例へばきさは清正を始め三加藤ま近習
の者達とも名高き殿してそ書子にもの是はめつら
しからぬ事なく皆心掛けたる形あるまゝとも
武辺の無調法なる時もあらむかねて出と
どめし何のましを今ある家に記し書して
後の人をし此書を披見有らは今日用の事は除

其もちまじき事を形ふ者なり

清良記巻第十一目録

一 法花津武田合之事
一 豊後より大寄付清良手柄之事
一 豊後勢三間へ打入事
一 吉々私家三島大明神の崇神四討事
一 豊後勢引揚事付法花津を責る事
一 石黒山内一の森高森を責る事
一 石城普請之事
一 重宗適正公事之事
一 山内敗北之事
一 山内外記寄来事付長宗我部元親加勢之事

清良記巻第十一

法花津武略之事

近年土佐豊後より土居法花津を兎角して悪念
不絶宇和郡を手に入て四国を手に治めん
とつもりたる所を土佐へ聞へ〳〵し人質ハ土居の
ち覚豊後への人質ハ法花津謀を以て取なりき
在なハ如是にて大人責落してゝ本望なる道
とて為く大人数を差向けれとも大人ことに強大
将なれハ小人数にてハ侮りかたく中〳〵手割なれハ
兎角侍共を力責に世んを難叶し謀を以て
すへしとて種〳〵の計策をめくらし法花津
ハ土居へは心易く〳〵西園寺家其外所々の
城々領主を随へ宇和郡をとりたく無則を郡

の大将にせんとてありけれバ法花律ハ其者を
西園寺殿へ云合せ再会せし其後人数を招き
引入れ討つべきとぞ内心して七百余人を
撰て打出越しける其後ハ土居を云合せ依之
義秋より指図惟任仁右衛門安西九郎右衛門尾崎倫
新右衛門其外二百余騎を従へ六月九日の夜寄
法花律ハ差越けれバ法花律謀にて先其後も居え
内山拾騎余船にて差遣し同方々の人質を取し
下中にて法花律の三郎不覚悟者三十四人を
船四艘にのせ同く海を渡る又其余ハ法花律
の城を出る事は能ハず是迄同心したりし人々
ここに来人質を取越其中にも侍共一向ひ其儀不
及らず只時に攻亡し其中ニ内某寄生城を取

引け申候ハ又残る者共ハ集り人数にて加金山へ向
高き所へ立ぞこもり候しいかにも二心あるとて斬にて
て落しけれバ頓是に打解指図の如く極しかりて引
て法延ハ其後勢を率ゐて金山へ来て押寄けれバ並て
未だ得の事なれバ者ども無成程城より打出ける
法花律方へ加勢の其後者誰ともなく打て出ける
者も一人も不出城中へ引て入其時土居家来後より
見つけ押寄法花律を中にとりまき入れ候にしかバ
乱忙して其後各を中に引包一人も不残討とりけり
法花律ハ此戦に敗れ打負切られけるを遁れ出し
して手勢ハ残り方々へ分散して漸五十人にて大
将にありて城へ逃帰り各寄を土居か指図の家来法
花律の跡より追来り城を取巻切りて維絶を打候

只今城を攻落さんとする形勢之如く家高々法花津へ
移りし退くべき者ハ浜辺を走り船を招き只今居山
見ゆる城へ押寄てけれハ城中より切て出るといへども
一支も退付て城へ追込ぬ事なれバきと仕所を無念に
思ひ居けれバ土居家高も亦味方の勢を引具し
既に大将法華を見てけれバ是を渡して一方を破り
旗本五十人斗にて只今城へかゝりきたる由ハ土居
有ける家高が勢に續て追来りあまた法華を一城を
見て是一時に攻落んと仕ルに我々ハ大将の御力を頼みき
近づく敵を切ちらし自身法花を落しまゐらせんと敵
多く追来り此由へ城へ入る事不叶只小勢にて敵の
後より船にて廻りてやうやうに落しる急き船まで乗あ
がりて後法花を残し城中の味方をも又助け敵を中へ

取籠て土居有高家高を可討兎角て望た
るへしとて大息ついていかゞなれバ三郎ハ是を呼て語る
たゞ頼みて誅に父々せんとまでにハ右兄へきて語り
之を取らんとすれバ無勢心得ずして云まゝに敵の
ハ兄あへて我先にと三郎殿共五十騎の兵を船を
浦より押付陸へ上り家々を焼払ひ以法華舟より出る
ありしかども兵を討是を討たしかれバ城中よりも
同時に宅前城を討け中にて取巻し五十騎の
兵共を籠さ入たる多数殺々にして一と打て出る所
六一人ハかへさるゝ者ハ何地より出し仕方なく
此節或浮より何処へハ或方を騎数向しきた
由是を軍の利たるへしとて引之しけれバ大友大に
難儀しれて自分打向ふへしとて勢揃ありとて

農商務省
農商務省
国立公文書館
National Archives of Japan

吟へたり

豊後より大寄 付 清良手柄事

同七月初豊後土佐伊予(?)し合せ土佐ハ東より豊後
西ハ海陸一度に寄て人ハ去年及ひ(?)一人も助けず旗(?)
豊山を又掃崩し墨になさんと擬する由申(?)一し
らハ西園寺殿始め不驚清花津ハ又一つて不忠落
しうる中にまて敵内通あり然共替附る由断して
ハ不可叶とて先軍勢の手分をさせらる所(?)水の川通
安ハ大森(?)宗西の川呂(?)佐奥(?)成好兼河原(?)側清(?)落
木主宗京良擬(?)津守(?)源田中野七右衛(?)奈(?)藤ハ土居(?)て
深て桜谷蔵生奥の川を攻へよとの事なりし土
三間の侍大将中ゟハ土佐を防んとせハ是後勢ハ
毎度三百へ折々旅(?)籍(?)侍り詳(?)に今度ハ例より大軍

よて攻来しときへハ城を丢(?)有て大(?)額ハ防きかたく
らにましき(?)陣をハ終の勢を残し並べて(?)ハ何ぞ
大(?)覚束なくはやそへハ居陣を望め中度と再三さ(?)
せられ共免角の侍に聞(?)さらうちにて思召けり七月
十七日ニ兵船何方とも知らず海上ハ陸子成て震(?)異(?)
のかし押寄せ所へ浦々へ溝着三間表へ日々へ押寄
おし寄て民屋を放火し早稲を苅とり兵粮籍(?)
日来に(?)識て侍ほの如く組ていろんなそなき所(?)
へハ桜谷古木尾(?)場河律(?)見里黒木土方任兼なと
いふ侍ともに打入野山田畑のたくらなく踏荒し場ち
らし草を薙木を剪天地荒蘭(?)のいふ一つもなく
そこ不山ある之侍ともハ両々ニ登り陣しと一合戦も
せさりしハよくも敵ニ恐れしとて見る一所三百手

てハ去居清原七月廿二日に子弟等を催し
集め摂を望めて本陣に参る其勢弐万余騎
なり頼義同国府に来りて兵ハ四千余騎にて稲荷
の営に入勢を出し賊正任が衆に上り営岡に陣
て是を包んで老追ハ清原ハ五十余騎を先陣と定め
鎌子の如く後ハ左右を備へ各人其外に首京を立
して是ある武則ハ将軍に立年の初め其前に出居
より然りて兵合をいまだ其気甚だ時々にて大敵を
それハ仲将旗ひらひらしと荒手に入替り一手として
三度其の軍ありてのち清原自ら采を懸け重ね宗
任後を続て忠ハし戦ふこと一昼夜にして正任が衆
森を追崩し敵ハ楯を棄て云因以へ引退くものを
兵庫頭楯よりけ出羽綱を立て戦に曽根見

房へまくり曽東を立て尻尾少しく追あけたり敵
討死事雑兵合せて百十余の首級を取し勝関をあけて
仍りて是の如くなりて其後勢二手をもつて是を攻
あつて営岡の沖に見へたり清原の日来敵に寄せて
敵そむけば其陣をあくまし兵衆ハ営前の木くれを
仕りしさんとあらそひてうちかゝりし左あるハ前後の大勢
むつかしかるへきなれハ一刻をもはやくかゝりて敵をおとさ
せ者ともを下知して書をなし一まつハ敵ハ仏(併)後さす
出るに寄ずハ敵の日上をたかさをへうちをはやく
退おもむき敵のあらかたをあつめんそとて一騎かけて
戦かけし息をも休まで楯を立並べ時に退散しけれハ
営の敵是房へさがりきまし其東の荒手営なる我兵を
牧野の八幡の前にそひらへ各家の敵をハ捕とのせて

退あけ由清郎ハ引出されてさて西條ゟ喜へ陣取大将分ハ
同の中七ヶ所に備てまて備へを定て一手ゝつゝて止まりける
大夜ニ又三十八首を持て味方ハ一人もなくてかれら白旗
あれハ敵ハ立石尻大浦ニ引て出居有けるを攻入
ミつゝて人馬の息をも休めける由黒旗備へ先陣を
ありける出居陣退しきれハ何事もなしとて御陣之表
ハ清郎へ任せ置き心安きとの返事ニて又抜傳言
しきるハ家臣まて其敵をつぶ申まゐりにて首ハ一切
もまとめいうらやましく思ふと戯言候のよしに
清郎ハてつし筆しるさきを仕まつり
てかくさえもかの首まいらせ候里

豊後勢三百人討入事

同七月廿六日子午時勢三百二十ちうちうと吹てしる

二万ばかり板島立間尻へ寄来る根元房兵田戸房へ
打出深田中野河原渕西の川を放火して以ての外城を
一人も不出皆城に籠り見物して其日を暮しける処
出居首尾ハ無双むつかしき軍なりと云て寄手ハとて
敵の大将ともに和泉ハ明神山より井ケ谷の前ハ嵐の尾
来星武部ハ下の森より攻めしに向城を立て押
へ居たりける中にも秋月主膳ハ出合と云平地に陣をとる
立てけるを清郎見定めて武蔵並人六良兵衛左
兵衛右京を進付て夜の大勢数百宇和中を放火
して粮籍とられ又宇和まで出合まで来る
一軍もなかりしを云て無念に思ひしに又
是へ押寄せん手戦強く偽て引退き一あて
当てみんとて敵大軍なりとも以て其軍ハ味方の出

農商務省

こゝゆへさて結句仕やすくなりなんとは明朝秋月
を打落しくれんとすなはちつかはしけれは右京におひ
ては明神山の敵は田中まかりおさへ下森の敵をはさへ
の末まて打入て下河原より里秋月に向ひ里一揆を
は押への人数をもあつくは入置なと申おきけるへしとて
雑人は田中にて古き私宅をさし右京は手勢の末
に出向ひ赤星か打て向ひ給ふ桜井武蔵先手に
下せ八日乃暁に赤星か陣に打かゝりけれは赤星敵
を侮り油断しけるにや物しく騒ぎの具足して武
士を集めて同音に騒きけるを防き桜井陣へつき
かゝるを武蔵も里おしつめて武蔵は手きゝなれは
打入てなる井とを見てその者八十余騎一文字
に切てかゝり武蔵を敵は小勢なりと見てかゝると

後の河はゝへ一町斗引退くなる井は弥き河をうち
所を待うけ為つをとめて武蔵縦横に斬りかけ九七
騎切て落せしなる井も秋月か陣へ崩れかゝれは秋月
入替て切てかゝれとも武蔵人数をへらし足ならを
けて続絶なて退きへさせ右往左往へ目くれてまし
武蔵か人数をつかふ様はさなからに旋下のことくく之かを
饗も不知あり一足もしに敵におしけれはさのみ曾あ
者もありくて体ある士率もあく事ゝ敵所為る抜きゐ
六七ゝ所は三方を見合せて居たりしか右京方手痛く
見てのけは右京方無左右荒手打入けれは敵は下森へ
逃の闇く味方下河原まで引取武蔵を川おとしむ田中へ
雑人とも一ッになり古くとも一合戦とまたしから古こそさし
もさらられ明神山陣を出でて居たりしは桜井

農商務省
農商務省
国立公文書館
National Archives of Japan

是を見返してさらに侍の土櫃も此をのに近り海ら
つきある甚志ゆひ付る土居くとのを立ち向ふ
逃入くりといふ人とおほし不氣多之とて盗人の陣に
清盛の旗を立させ相當の貝をならさせんれはい
つれもそかつりたる甚業のこゝし秋月如き井者皇
須もも志ゆひけり古ゝら東先にちゝさへ林治さ
押出多く處に出居の間に於清貞の馬足りせし武
井も若さし當り我若清盛出雲軍人の時出征
まて一条殿の若残千余騎に有りきれし覚之めもと
究竟の手柄の老武者の大将一騎かまり是有りに
古ゝら勢の中に月毛の馬にのりたる侍たり出る目さ
如くれともの形たれ此馬を取りて乘りしと呼はりけり
云捕りたる大森の黒口とて菊池の逸物なりしり

いかゝしたりけん款の陣古ゝら勢拒中を免りを伴の因
毛の馬武者ちて矢庭に射殺し乗替千余騎是を
見て一所あまりすき寄りいかに因毛の殿ちを打ハ
此返うていふらんつて中は某ハ出居の某藤房千余騎
とや去ありてはまゝ方の家通しし古残黨に好み諍ひけ
ハ当りけり侍めて足当けりいへいハ家ゝ御中家と中しき八
侍革たる馬あるハ若殺ゆくハ是へ汝あれ返うし一騎
負けくまゝ出あるを討くまゝ某の敵く又某ら首を
そ方ゝ中あら某のあら無の精頁を極め中器をもう一
但しも古ゝおとらん古ゝハおゆらゝ事成る大器之で恥し
め出あるも内毛武者たまらぬ男さてよくしてそ中
さゆらとく某ハ物の数ハハあらねともも石松六左衛門とそ
古ゝら家の子なりし此ハ関え出及てく列の志にあ道

古へ或ハ百三ノ誤り乎

はなはだあらくれてよく一さんに来りて岩の上へ
かさね廿人ばかり追つきけれども少しもおそれず小脇に
めかけて武井千島備前のりかけ追かけ足にあててこれをさへん
とす千島備前は三十一歳力八人にてあらく追ひけるは利かず三尺
五寸の大太刀にて彼が右の足を切落しければかまはず
六尺余の大男なる千島備前を中にとつて我が馬の前
にさしおきかかる処を織目の茶屋にて八人切殺し
かけ来りて引かへし擲伏せ首をかききりやうやく月
毛の馬に乗りて家に帰り来り四角八方一追ちらし
え内類共是を見て大に悦びて七人まで討取ぬ其後まで
当[illegible]千島備前が又矢を射させて乱しける
つめ引けば忽ち雨の降ごとく射けれども
みな遠く射てこれを不覚なりとて一付歎以上

十二人切ふせけれ彼が足を引と歩を一つ橋のつめ
まで来りけるがここにて四足をさつきみ
樽などくして誠に又に味方の陣へ
押しは前代未聞の大力剛の者とて歎味方目を
驚し嘆じて是をつんめせて海を前代未聞にて己の
剛にて戦ひ数の難六十二人討閲
返し味方又十人けれは

吉川家三島大明神の蒙神罰事

かくて吉川家は又明神山に陣を取て居ける
に九州にハ提馬子又死母宗
首神社悪年大難神子
引よせ殺し焼つひに情
吹くこれハいかる口なる人の如く矢を取大事

はふみて佛神を敬ひ先祖の名をも穢さじと為なり
目の前ありし我敵も氏神我猥さまに萬代まであるべき
事なりと信じては神慮にさかふべし明神の
まもり悪きは何も無き是は國家の欽神欽なり
明日桙よ勢加家をもちゐかけて討手あらは底
式様一揖のほか當家の我信ずる熊野三山の權
現正八幡大菩薩別ては當社大明神の照覧
あるべき今おもしろきは我が家の子郎等何れも
よしなきことを耳に入れて此法の限りなり
つれなやさらば紀の字をば北ぎ方より俄に雲か
きくもり雨は車軸を流し風は樹木を折
大洪水して野原田原一つにながれのごとく
なりぬるは何事かは老翁の覚へつまたぞ是曽

いふありしと諸人肝を冷しけり明れば九月廿日の
下刻よりして雨やみければいさ未角を競
ひて清良はいさみすゝみ合戦の手を桜井
鐘の鍵を打ちて一陣は名乗り一の陣飛法の末
をもして兼て清良飛法の軍いまだなし
軍法とは云ふは彼は皆法なりは式方まで八
本法を調へ是はなくて云ふ事多きをしらず
先某は當家へ来り時に始めて人数をたのみ陣
の前首尾よくは是なりと言御手を集め鉄先陣に
備へこゝに武能先陣をとりては左右の備へ人
は左京に林に其左京の亮備は神ぞの西より
而して山との間に武蔵似水は是は先に高橋より
攻め勢一度にどつと押寄せたる手ぎはにて

討伏切伏追散し仍の手当も示々無ひの外
取ろし押崩し六十余人生捕にしてをり手負
名ある武士も多ありき里にあれども子細を
委しく露さゞりしハ此日北嵩方より神威頻に鳴動し
光物散乱して大将が家を夜半に射出
其外家の子郎党十二人弥倍雨風に悩され
夜前より何故か食りけれ不調中ニ病気ある
きし由へ働事もならざりしと云々是を評
するに明神出罰なりと人ミ恐異怪しみをなし件
不祥をめひしは秋月赤星めぐる丹なる川魚
より是を見んて出けつけんとしたれ其夜前
よりの大雨に川水おびたゞしく出島橋落て遂
に渡りつきやうもなく川端へ寄りて味方くて

なすを見物し手をたゝの紀立ふさぎして七八人
幸ひ里人勇めども兵庫中々かなふべからず此時
明神山より打出られたる軍兵も味方の陣
を伺ひ川端まで落来りしが川向ひへ渡る事も
中々ならずして彼方此方たゝずむうちに敵ハ
跡より追かけ兵追つき其紀のあらさまハ無残
方川中へ飛入遊き渡らんとせしハ漲る落へ山川
の逆巻る水に押流されて水にわだかまりて死する者
数も知ず数を志して漸党是を見て川を渡りし
ものなかりけれバ向ひの畔岸の岩木の茂みに身を縮
め振ひて隠れ居るを此ものども追かけしさ
れども麻兎狐狸なんどを狩出すごとし岩穴洞木
の穴迄求め出して打殺し都合四百廿五人

討取偽関として揚ヶ名社ほとりにて肉食
を祠神前を穢しまつりし其報のほと思ひ知
させ給ひて畜類のことく殺されたる神罰の程
あさましに恐しき次男之大将和泉守をはしめ
郎等の者ともを以五十五人の首ハ神歎の長史宮
野を穢しまつりし者なれハ諸人に見せしめのため
とて是を出して立保桂川の辺にさらしけるとそ云なる
さ獄つなそのつきたる所を肉生捕六十人廿八人
ハ切て於此所二人ハ生けて其偽して本國にこそ帰す
様を語らせんとて宣旨の請承也様子を聞て
國元へかへさんとすれハ家にて二人悦ひ勇み
奴ともにてつかハされ遂に清良此事を聞て其被
下命あらし譜代下人の如く朱印にて召仕ひけるとなり

此後も切て豊後勢に向ひなハ頃日ハ本國為に
かしこまりつきたる阿らしに付ても居方悉人数ハ心
かけると為方術ハ如此なかりし謀り為し大友家さ
清良をたくらみ遂に九年か一名清良旺お家に
対し被官衆人と下敷ハ志遂に為さる所まきハ
少しの欲ゆへ我を求むるのならハ剰へ敵をも見海
らさきてハ以後の軍未難しく其擇ありて見せん返せ
とて此二人の奴原ハ直に本國へそのうへさきまて遂に保清
良の智謀の程そまたまさりける也

豊後勢引揚事付法花津を責る事

去程に同八月二日より宇川和泉守義遠ハ清方の豊後
勢悉く一所に集り其手分して法花津の城を攻
の城を守へ押寄せ七重八重に取巻き昼夜七日か間

息をもつかせす責通しけれは城中堅固に持こたへ一丸ハ
中に落行ける所をあく攻あくんて同九月廿八日城を
遁出し上瀬下瀬の城を放火しける家の小柄を
八月十九日廿日に諸勢皆々同国せんとしてまて持
よりまさに打向ひて宇和三間に押よせて太郎左の城へ
ハかつて落ちたりて夜々あつまりし事ハ大家なりける石房ハ事
子は目に付きて深く相手なり迫しける風情にて
石黒山内一の義を責候事
先度石黒と云ふ侍評し定め東西より是攻寄る筈と
也一しかるに去依りて是不寄来事ハいつしかも以へを去
卅日本郡長曾我部元親数遣の斜ありまた風情し
きかけより是当家の我国を氣まひ其後の是ほ
を遣し出陣さきるハ深さ通し元親別

儀なけれは是非の度々に丹一不来る事を無念に思ひ
同月廿一日に石黒山内を責むと持ちしに七百余騎を卒
而先竹林院寺河野を攻居せまて俘縁多く一寺へ入所
同中野の北を荒し立て是を放火しける所といつもの云義
之通正之数を負つくん是非石黒山内に怒きなりや数
陣ところ云甲斐ありしかる中に仍て所かくなり四五日をさ
打ちて後居られる事して言ふ不子細あるて行儀人是非世
して廿三日廿八日ハ枕を中々の不参乱斬に打払ひて云
去度ちり雨ハ態としてはけ無々仍得名廣之氣まま
お深き道を方を使ひて人を出卅より石黒当地に向
ひ五日以前より深く同中野を攻ての不情良へいひて
彼らを是迄遣し終えて不知秋をてまてなる事
いかなる者と通して情に承ける親安之體此

詮ハ中野陳向ハ毎度某ノ軍を始るに付て全以て
かり見物して居る迄は拙者度戦ひ軍忠を尽し働
くといへとも手袋引て居戦なれは事にて新く同前
なり是毎々戦負攻落されたれとも西園寺家
の儀大事に存は事にて立去り端然迄八日本のごとし
免此為に十日に限り清良彼等を所々へ遣し勢然し加家臣し
さ申所ろの是非清良にまかせて聞向ひ打散せしと云
思召以の事を云根元を糺し急も軍方をも見せ
されは能記しき申を思ひ敵中迄ハ清良をはしめ
ぐらしや是を遣ひ人是非向とて使なしらし
はかりハ辻打出んとし候にて西園寺殿近習の小性元
度に是猶ら宇和にも数ケ度せ其迄其一合戦もせず
深く軍の志ある小軍野数様に遂に度清良へ随ひ

て立向ふて以上十六人上下五百五千騎清良に付従せ
り就清良手勢合せて三百余騎にて押寄せたりし
か不思に一の森を捨て出られ向ふ清良鶴翼に備
へ不思を清すまんとす家は小性元より数をあまた人
その志之不思此頃勢を見大勢なる事を叶ひしとお
もひ一戦にも及はして東を伏して谷に山内へ
高森の麓に至るに是を高森を捨て清良におひて
向ふ彼らは六百余大将なるて武家は小性衆を引入
その上に向ふて十六人の小性元より立居の功者十六
人にて武威に文雅翼にかくして山内は奥鱗のかまへ
無く平に勝負を決しければ志ありし其戦の家の
武威をもって功者ありて不思かへりしなは六百余
の軍勢をしてゆひ追出し取りて東の方へ一方に付て

三方より急に責付山内も叶難く退散し何連も
小性衆ニ至迄手柄させ雑兵卅六の首を取勝
関を作り御陣ニ帰る押詰られハそれより浪山を誂て
歎きしく敗小者只清良の旗を見連ハ歎方ニ
ハ遥ニ敗るを見て何れも家此時ぶ度々心付けりと見へて
本知る事も遅きを見て立間木佐方立間尻三ヶ所を清良
ハ家取り候元来一家の事なれハ奈良掲得る
落木三段も家ニ益翌揃而寄る度々清良を旌
頭の標ニ見ひ心を合せしハ何時よりも地戦の時ハ
五百余騎ハ陸ひ百姓侍合せて七百余騎擬る迄
ハ不通とて清良浅く祝ん事ハ難成こそ
見へける也

右様普請之事

當年中ハ風あけしく寒氣甚しけれハ其後より
寄せ来る事もなかりし故ニ民を休めハ時ハ十月末より
十一月迄ニとて石垣の石垣をつき立前ニて
材木竹集め年の内ニ初組其て明き春ニ家作十年
二月始ニ普請なすへき頭内一觸出しけれハ諸民各々
て所見正月中ニ夜を日に継てかせ紀二月を其業
銭付其並ニ二月朔日より普請ニ見魚ハ只十日
の内ニ片付土居堀水を城代ニ存ても遅也と候
此時諸方ぶの人足加勢とて外材木諸道具の集候て
彩し西園寺殿にも掃り給ひし其諸人中ニ高く申せし
是偏ニ清良公ニ礼を存しし諸民を憐む慈悲
深き故ニて芳へしぞかし志参り敬まて然てハ
黒勝為ニ存無敗主人とて恐且頂ふ出来之多り

農商務省

なれハ平生家職を勤むへし依て守里收之の行
ひを承れとかく後ハ徳をもつて導へき依

重宗通正公之事

同年二月末々鷹木三河守領内之百姓八助と云者
中野の内澤松の山にて竹を切しに山守見付追かけ
けて竹を取返し其上にて其者を散々に打擲
して大方十死一生なり然るに八助か隣の三助と云者
右之由を彼山守に云ハ我山にて門松を切しを
見合せ搦め追ゆへ免くれと申せハ聞入す依て
或ハ又村中申合せて山守に押寄せ何事を
すれハ我近所の者をかく打擲するそと
云合せて押寄する所に山守方の仕方の限
りに押寄て取返し七人と云て翌晩三十人斗打入

山守七八人の者とも家を揉潰し半死半生に打て閑を居
くりてすへて重宗通正の小姓河狩りさせ給ふ所に酒に
酔ひ是をよそに深ひたれハ鷹木か柏田と云者をまて
田起り百姓二十人斗に刀を授威し出て追八百姓
とも見れハ急き取る刀を引抜きしく桜
合せ六七十人の侍どもを追払ひ下部十五人
にて負せ大笑ひして罵りける依て
手負親類ともか志申合せ打出て搦まへ
合せ人を見る元集り五百人なり追て鷹木
の百姓後失して撲入追入て村中の山の仕方の
とも見るに郷八助三助等一出し入每人見取
殺してに是を八郎してとうく我百姓のやう
つきて追を手代と付て云て出せよと有し也

通正押寄せ其中にぞろ出て上意なりとて
つめきて鉄砲打かけしかバ城中にハ案に違し
あわてふためき西国者ハ年内よりすこしも心ゆるさす
しきりと近きさへあらんや其儀ならハ軍勢せす
とて物の具もしらしなかくめ木戸を閉て弓鉄砲打
かけ防きし出居るハ是を不知何事にか有らん高崎
より武士を遣はし鉄砲の音をとしけるにハ
是ハ一揆なり又落ぬ残敗兵物なりと御覧して見
鉄せよと云し者之を見ひき甲ろ事案持ちに出て
鞭鉋を合せて升一寿行きとハ何ようと云ふ人三升ハ
通正に付居りしか当て萬近伐真下り沢来りて
人数を立出し柏田に押行を通しい克免とて人
て閑章なりしか幸使とんなに細をいひやられしが

ハい是まてひかへ押寄られハさんしく不進なりしか
ねくきことる者共にひかみそうとも居勢克て
かくし高森へ押寄りハ通正あきれ者なりと是ハ
此所なる天魔の所以かなと猶さよしいかりしを
依其上人質なとまうてかし妻妾の婚姻を乱され
しかハ物ハ常有乃事代りに細にふしして事なる
然是ハ寛安三年なりしなくと云しハ謀られける
き空言之を以て考ても百姓の三助なりしき
くりといひしを三ケ所とあやまりたく事なり
并に不届の事にて大きく騒ぎとなりしるなり
しきりなる所かして保ち乃しけれハ定るよ氏通正
府ハよりかれ事にハ情をかし働きさめ覚発しし
なさい小事にいふかして下もちハ云ならすいハ十年人

土佐傳年後の歳ふ…十六ハ陥くへきよ

大死をさせ侍らむとて手負なとして出来西月残失
ふのとおもしれ恥のこと此損かおもし給つますとしきを
しく笑ひなりつらしむつかしき之水鳥の羽音に
驚き白鷺と源氏の旗かと見て周章騒きし
美濃尾張の難に乃かゝりて人の心をたけしく
下民百姓にいたるまて此の事をいひ募りて耕作
てし勤むるも怠りて今はいまたかくのことし
上下共に闘諍不止秋中晩まてしれ敵は七条
にて又味方は猪大路に至りて同士軍にて此節なとは
かゝる有様のことく出来そろしあさましきの世なり
治承時の如く乱れて心ある者は歎きけり

山内敗北之事

同しき三月廿五日又土佐一条殿より山内家記に
七百余騎出張して東向ひ中堅畑田を通りて
二ツ森に陣取山内の大森へよせんと吉良の白
彼方の邑へ向ふところには志して降参とてせさ
る事由比之大なる負して同前なれは此所に置て
は叶まし急ぎ向ひ時の習にて追崩し家記を討
とまに至れは若人中に於ては彼は此ゆかり軍者なれ
は本陣によしとては赤しくなりなん先を白は其ま
さして取まして見るへき集め百姓等一揆をさせて
出張しく本百姓に日来軍を望中せん者
なり先勢か騎りて見てよりて着到を付させ
けれは老若合て七百余人之をしは大方の者は
に己に迷ひは如何まとて方々に所々屯し人数
騎にて夜中に足を延し回り小坂に鏡の陣中

出問合て赤土の尾ニ篝を焼家老ら檄同
しく思付一人ニ逃去隠しに来たりけり山内家
添ま者なれハやがて此危きをさとりて言丈せ
去葵の来へ引去て夜中や河原剛原山を越
こうこ吐ヲ中河原剛信忠は其の夕まてハ承代土
佐の味方西国方ぶ承の敵なりヲ中へ土佐方を
具負しかし居住方とあまり遠きそれをさうまひ路
ハ住具中もさ云閣なる公廣合の心を庵いかなる事
そやと不富時なりし依大将兵て一書を伝へて法
忠去さるへしと諌申せしに帰て国の路をすて去
りうそ足を悪ミ各心の修りて七日まて逆心す
似くれハ塚息し皆嘆きをそしりしを何ぞ
去りてけるん黒瀬殿東の門前にし

目次郎本多縛子共ニ付なきを
為ニ四六のさいを入しどうる
返しさえへて又いかなる者か此れの奥ニ
目なくもひさ本多ひら手にうたうふ
さんをんしすそまくちすする逢
さそうき流きり

山内外記寄来事付長曽我ア元親
加勢之事

同四月神さ土佐よりての河内より先度山内一戦
ニせて陥ちりハ重て彼を敗て土居を攻落ん
へき謀也田を植へき真最中さしよせんと擬
去るよし嘆へきれハ信良領内の名本子籠後
し急き夜を日に継て四月中に田を植仕

廻して仕返しける所へ梅右衛門家人なりける右
衛門をかはりしに藤本氏を撫して家中や守来
又ハ籠城不成五月三日の暁山内外記五百余騎
にて陣の森まで押寄せしに附左衛門留守なれ
は重宗の人数かれこれ合せて百騎ばかり常識
をそ支へ清良ハ百余騎にて中村川へ出
きに手筈之処なる長曾我部元親常代の表裏
なる大将にて内々思案しけるハ一条殿攻落
さん事ハ案の内なりされども我か父より二代の
家の高恩をも忘れ其上保守へむかひ又
一条殿は近年ハ保護致一条殿攻させ保守を
一条殿をも入れさせてハ不叶而は時一条殿を
土佐国元を与へて以てもとの主自然又保守と限

して一条殿戦さに勝利人数かくまであらハ何とて
も若干の人数付きなれば進んで只毎方と合
を争ふべし何とせん勢ハ皆我方の利運なる
を知らしと云つゝ毎度家を評して合点味方共
ふりたる国沢城中に二百余騎元服家中の加勢し
山内と同じく枝向け西沢ハ芝村を経て下浄土寺へ
押寄る時ハ是を不知陣の森を心急ぎに取す
国沢にさしかゝる所に西沢能仕合也とて蕨真に切
て懸桜井ハ先手にありしきに川を見合せて勢小勢
なれば兵雑て討人となりける又は五六人引退き
ましありしかひ二の手へゆひて桜井ハ川を渡り
東の人数を打ちよせ敵の後へ回り西沢ハ小勢を二手に分
毎方共散々に蒼り清良ハ西沢なりとも呼て懸る総元

親子合戦あるべしと急ぎ積り出られハ福軍大勢
なり軍よふせぐ者なくして旗本五六十騎ハ数の引つぎ
居寒んとて東へおちて中の門へ懸付られて内桜井
能登守しめ若人右京三方よりつきかゝり火花を散
らし戦へハ清良の旗元東へ崩れける共喜んで國侯
の勢五十騎ばかり追かけ清良の旗本付て
引かけ見るに敵ハ引詰て廿騎あまり退時に打
出て大将勢斗合にして西を指て落行所を又指
津の守合せて追之せよ其時勢無強の数子一先ぞ
大崎も無届方等妙寺山へ逃て其山を追て付ぞ
しられハ小荷駄の物具兵粮なとハ皆捨置
て皆打捨追て逃て上下皆味方共人数大分追を
見らんとて少数乱して而へ山内ハ國侯がケ程と見苦く

打負べしとハ思ハざりしに此有様を見て鞭をあてゝ
馳付て出居の旗本ハ國侯を押へ桜井と若人山内右衛門
右京桜井等四人の者四方より無手に追ハ宰宗右衛門
二手に分て山内の跡より見えて山内又行衛を追かけて
敵色ますます乱れハ数把く十四五騎にて五百松の
方へ引かけ出五百余騎を五手に分て追てまた丸備
を立て清良ハ國侯と山内が宮遠く追ハなく追
たる味方をまとめて山より國侯下る事ハ成がたく若
もしは是にて押しら追ハ我等ハ山内よりも先勢
出て豊かしとて高擇院境の内に押へさせ我身ハ旗
本川に打寄せ山内が備をすゝて彼ハ無二の合戦と
心得出陣して偽るべしと上下共に思ひ入ける踊之者
其数ハ味方共一倍の人数なりき三月に成るべく引又

農商務省

々段赤貢孫をうたせて其ハ陽里かくの家へし錦ハ
思ふ萬にうつき敵あつてと旗ハ藤木の播の下に陣取尤中
ハ下津本の寿の上　に國伏山内海敵を支備神主山
内に手取合見るらひて居たるを其居ま里傳名当て
三十騎斗の人四方余人を立て小坂の峠に打ち出て比辨
をとして桜井豊右衛門云字るハ敵ハ味方の地に踏入て味
方ハ敵の地に入てその上大将の旗ハ藤木殿の居子ひ
ふめしハいくさ間味方弱し新貢よりと覚ゆる之處
ゆうんと思ふうてしハ為らさへしてもを死なんと思ひ
しそ死き共に一して不叶而あれを覚語せり足よ里ある
切ると面くら我ふつきやうて唯一人かけお家傳ふ
らいふき及ひをし々人下く指さ多しむをき見程て
つ家へきとて一人ハ子孫引るく傳て書つ写寒の

桜井鍬をすゝしめ入ちるいえに合窟を窟瑚に責戦ふ
情氏是をみて敵を一むしむさんと思ひしを又て太く
未遠しくうさ追るれかれと郷人其の其戦ひかれら残る
くせてハ叶まし　つけや者ともて东ハ敵の殿口者道ハ
とてつさくとあせて小角を吹けつき三方を里攻寄
を蛛千十文字に切りて見追来さ彼の山内を取り指
を付して逐て其兵を悲追し士卒者追ハ採幣よ足り
り逢て集引自由ならさかくてハ叶ふへからすとて东
一方あきたるを幸と思ひてるの願を向家らいなや諸勢
一度に崩して追さ抜うと追打家を取りしと
追打ほとり河原渕を二里の間子追詰持ら付多く
之敵を討まり計ま山内ハかゝる節ハきて次山路に
越ら付に其状ハ坐る遠山を里ハ出るり付るへき懲せ

農商務省
農商務省
国立公文書館 National Archives of Japan

さて次郎丸中村川芝の陣へまかりしを押へ留て今や
おそしと待居たる國沢終に見へさる故後より山
つたひに木材根葛に元つき人も通はぬ難所を走り
き柳井と云所へ出て出標とりつきしよりや情良悦喜
して先年土佐の牢人しらず居し時中村八幡の祭禮
の夜元親の秘蔵の相撲を國沢が情より次郎に勝しを遺
恨に未情良が奉公にいでし元親は目をかけしかも元
より元親一条家を破りて後此表へ働の為に建たる
大軍を卒て来り家臣とも従の如くし給ひ勇ましく山内
出陣を手痛くしてかつ戦へしみ事を擒を踊寄當梅
黒立るかし可若たる元親果報有て天下を知
程の事なりとるたるの旗下なる者とはふ時此情良
あひしに成るまして苦しきを時になりて在唐土へ

其命の根を切りて家を立なりし清良給の勢を以て
土佐豊後乃大國大敵を引請いまた降参せざる毎
度攻戦をいへ元親卿ふに八闘ひ迄元来土州一條家ハ
豊後大友と縁者なりて一味の事なれハ其後ハ又相より
敵一條家ハ一度清良流牢の時と彼に来り近江ハ縁
者一条家も報ひしことを以て彼を頼み皆運を待
其家の援助をも受けし二石本知を擒しして武略之
さまでも元来其後と一味の事に西国有家を當國の
大守皆攻引受戦ひし事ハ今又長曽我部元親
来て一条家をとし當國を領へんとせしは是亦敵の
事ならば如此悔恨ふなり面々勇も寄て足
首共を集めさせて首帳を付きとて討取首数雜
兵合て百十三とそ記しける同月四日己の刻に勝関を作

是をのきさし怪しみて帰陣せり

農商務省

清良記巻第十二目録

一 河後森を責る事
一 一條兼家卿清良戦陣之事
一 土佐豊後之両敵を清良待る事
一 三好長張鳴之事
一 高森合戦之事
一 蔦木城寄手押拂之事
一 兼家卿戦を廻らさるゝ事
一 土佐勢夜討之事
一 鉄炮之助扇の的を射る事
一 清良西川四郎吉高へ之腕押之事付合戦之事
一 土居と西川へ押寄る事
一 豊後勢押拂事付一條家へ清良戦陣之事

農商務省

一上山藤左衛門高木三河守戦之事

一善家六郎左衛門空峰之事

一桜井武蔵守敵の策を見知事

清良記巻第十二

河後森を責落事

永禄十年六月二日西園寺殿ハ心ある陸大将領中高左衛
門尉日向守ハ土佐一条殿の協力なれハ土佐より敵当国
へ押入る時ハ必籠城して居まつる宇都家方をもつて係与
勢土佐へおいらんと志ハ先手の勢遣ハ味方の利を告て
軍代当事ハ成法忠を今のことく猶ありけれハ之一
条家を攻亡されん事業をさんとせしともありけれ
清良なくハ三間中ハことくに土佐へ心を寄せんと公
此上は土佐長宗我部元親も一条家の城を取へきたくミ
取順ハ中のまし風聞有けるに先一長宗我部土郡
を宣中せは南敵を引請大切なる事にや先法忠
をまもりまでて我も再三盡言をもつて諫申にもありけ

其後清良大将にて三間中の武士を河後の家を攻落させ
法忠を誅せんとしに有りけれハ清良畏縮して然らハ
出羽ハ後法忠を責てハ其愛子を繩にて採田中豊後
法忠が婦も共に尾ありし西の川定完を法忠被官なる
入八九ッの悴を皇前出して婦をハ早速に平弟
やめしめ結句かし家小勢の走りを家改所にあって
救ケ宗の小城など立て其軍も存分なれ共雑威を
首を取りとのまくは延引に住けらし土佐より援結なとし仕
為れハ孫六ケ家臣とも申せしかハさりとて西園寺殿後
詰せら家へ一つにて七月下旬に出立河後の森へ押寄関を
揚られハ法忠驚き戦んとせとしても蒼子武人質に
出し逢てとやかくといひ叶はずして既に引たまく其
取を持て籠城へとやかて其鶴の信を以て其とも申

事ならねハ押立かなさらつきたる二三ヶ月深田中豊後諫
共も然れとも加しへつく所業逆心の事にいて為人ある
平中と成る事とて土居を心延しある大将なれハ
今後を延てより陣をも引退して中と土居の後詰
行って少しのことしも清良のかまひと念
込て也くあるとも諫人ふやにさらし共未だ聞えず

一条営家ゟ清良討陣之事

其後西国寺殿より西園寺殿へ出向とて京と
申て聞けへ俄に勢を集め岡井河崎立花へ七百
余騎出向ひ陣をとれハ伊豫にて土佐より法忠
を救はんとみえて出向かふとして清良猿奥重宗
清俊を始められ其余騎楯谷松丸吉野菅蔵出
奥の川を支へて出て立依りけれハ土佐の武程殿とあられ

をやくとる左手に鑁しくやたたんかへられ伊与より
に款と和く成に取かくる事不及たゝひに多かくひ
て居くしぶる折に良孟宗盆の事を是ハ伊与方にて
ちゝを羅を催し見ねしく居くしか十四日の雪の
程に州の事へ大将上山義高へ夜中者も心に伴あんし
婆に瀬さ来くれ有一る兵庫頭本三に守出ちけ
足へしと伴ひくみれ其義古馬へ云庵しれとし見おり
さ条からものを兵矢にて陸立向の事やからふ兵庫
ゆてされハいかに楚邑へちらしとくりくる湯後の人弓矢に
陸備なるけの為すくしかと云かれにさらしさくさて
引之し者にかく来るも羅ハ不止もまりあかりくせく
見ねし居くる八首く赤くもいちいか見えてふ々ねて成たり
人見其を浸くりてくくふ其有にに何々たとし旅の

土佐羅やな後をみせつしゃとみせちつくくるくひとる
に土佐方殿くよ負れて後を見せし心ちもゆとし
さて十六日に清正款をハよせんとのさし陣に来をへきて
き前の役所を何事く待くれとも当家ハいくことひてる
十八日まて引拂く陣を進めり伊与勢ハ是を留て去之る
今度ハ軍ありくと見え

土佐豊後の両款を清正伐ある

同年八九月より極月まて以上五度土佐よりよせ人ととく
河邊下家中への者をに清正も八九毎月に佐色の宿中
至進ハ丹後ある人を土州に付置經少今先ある子を里萬て
覚悟し款を当ある入を陶しくす討との行にて陣の森に陣
取しく待し申へくとも当家に是を何やふみ陣へ伊与地へ
然
ハ打入られと目打ちの入るとされ只ハ一軍もせ成して引申

れハ其後よりも弥しを陰かひ居たるに一旦王事として伊与
地へハ不責入此様子をいひたると考ふるハ一条家ハ元親が振悪
敷事故とて阿波ハ庭にて是をとき一つ伝ふ土佐にてハ元親が
手段を悔ひ逃して只夫ハを討ち伊与へ入ったる斬ふりぬ
兄へハ豊後より以前の四国を平の内まて制をひしめ
へ数ケ度大軍を指向ひ候へども軍ケ不分帰ケ不入引ありし
そこ立元親此頃ハ一条家を個ふと呼て来る多めるしかれ
思ひて情を不入れけ法をとりけれハ仕方とてハ此者ケれハ
其の後ハそのわしき軍ハ方々数ケ自然の悲ぶる事を心に
仕損させんとの計なりへし八九十月の始めまて其保ちたる処
せ来りし宇和への兵をめて備を甚大なんど勢ハ毎をまり
也ぬる由しき引し自宅軍仕損じ多々在やたるれ只土戸
云ゆりの許必定之さりなりて元親なる事ぬものみる皆

家へ加勢しそこのかし立家事なれハ油断してこそ悪かり
なんとて伊与ハ兼てそ覚悟をきし居りける

三好長張事

永禄の初より阿波三好長張ハ去々年八月に
ハ公方義輝を弑し天下の指引をしてゐたるへ五歳
内をこれ亡ぼりと治めたるに荒南国淡路阿讃播へも彝く
とも阿波ハ自然打向ふ時ハ近く居まハ毎度近江路を
り加勢して追払ひし今もハ合戦ハそ心の一つて天下
の兵を志なりて京近辺をもなくしく治め置の為る故
今又近藤され信長夢出来之とかく武士ハ只ひ立し兵を
急さそ将を向け兵の志き事を恐さ故かくらぬそをかり
一しまくしてよきる事を速さし遅くして結事ハ緩くなり
兄合せす一ある一し是何なからも武士のことにハ根り一り

られ諫をめされし三好なとハ心鏡やかなかと見へて何る
事ハ至さて候かと云ふ之河原別法忠て夜をいかさや
りけ私辱なれとも高産の種を遣されん為にらんし中
者共ハ是を侭さしかり家へ呼見て寝しと見るか之又やかて
欲とも味方とも不知其の手を有へし然共達ハ被召出宣
負候是ハ彼か志やく何方ことしき如諂ひものあまき八
後さハ法忠も芝の為さ其召人手眼前に何里志からぬハ公廣
々芳所々の損ありて恐ふくハ此様見なくハ三間中も去依る頃
ふ事積さつけこかわとく之と當時未来を考て清良欲息せら
れ見もハ有る是序臣属木三河守を始の良従まて皆志と其
感しあり

高森合戦之事

永禄十一年正月始芳家元親か手さ為意趣としを云て起清取
かくしも後芳家子余騎を引率して當國へおもむかれん
とある附元親やかて五百余騎芳家へ加勢し本末をしのへ
者共ハ古居より西園寺殿へ此旨告知らせしさと州て公廣々
七百余騎引具し陣を衷へおもて出是を支へらる清良南方安
大将として五百余騎にて吉理厳生をも望色々を二月二日より
十日まて働きけれとも欲よせ来られさりしを公廣いかゝおもひけん
てや十日の朝引拂ひ黒瀬へけるを悔こと思ひけり然る處に清
左勧修寺をり早ける様にて芳家元親旗を立て宿蔵
へおもむき口へ攻入と中小急き後詰能かへきとの注進なれ共
誰かれとなく有けれとも其旗の大軍を恐てや又いつるかへ
有そかて辞退して我おもむかんと云者もなかりけり
叔ハ法花津山田南方へ向かりしかハ三人子細なく請合法
左へ馳向て其勢を相違して同十六日に芳家子余騎をさ

陣ヶ森へ寄せ蓮木涼田中野三の城を攻るいつれも後
詰を頼て相支有りし公廣より加勢なれハ涼田一の
森ハ殊に兩錢ら近小勢にて城を持かぬく難儀にや
及ありん思ひに公廣へ人をつかハし大勢ニ城をかこまれ申
上城中ニ水乏く今ハ防力なし後詰せられき八一每ハ
こ一を見て中さしなくハ是非に及ハれ降人に成りて罷
出るゝ外をいをなくいかゝ可仕哉と每度窺あれ共後ニ
後詰の勢差向されも甲をぬき弓の弦をはつし降人ニ
成りて人質を差出しあり々ニ後土佐方勢にまゝし高森へ押
寄攻あれハ情良より公廣へ注申しけるに如く有りに中地ル
一每日の間に落城之し蓮木を小城なりとて軍達に
落め候ゆへ之ル有ニ申要なき小勢にて山居事ハ彼が
ぬ何ニ攻寄せ中とし情良籠城仕ん程なく八中く卒介

手ハ落され中頃歟ありしし情良楯籠かハ公廣も黒瀬
へ引取るべくて叶ふましさかハ西の川河原渕三間
板島津島ほ迄悉く土佐方ニて相成る是一板又大
将とつゝ廿余町を隔て其端城を目の前にて敵ニ攻落させ
後詰のなき武勇なきに似たり是二つ継て度々運を
宛いとし後日仕軍難成て有之是三又旧左の加勢令吶之
間す疑者是を我相係さかおてや残る武士も武士まで
さ承す似たり一し是四板武勢帰朱いと一軍ハせん味方
の為をけを係て延引せらし土居重ねて口ハなりきいかゞ
いへも一人なりとし罷向ひ打死て仕いる悍某相果いゝ
西園寺家の軍なされにまくて有ほ座義是五とつふを蓋
し再往申されれハ西園寺殿ゆ同さらに久枝又左衛門
每人は手々能れやて一番與成小の川每所の武士二番

多田信濃三番土居堅村赤濱吉田四番久枝又左衛門五番ハ
鰐崎より西浦辺の武士六番ハ旗本首馬家藤奈良ハ遊
軍何れの手よりも弱く見へむ方へハ土居久枝入替り一
しと定て二月廿三日暁公廣ハ土居大蔵へ打上り松原に
を押立られきは公廣其日の装束にハ赤地の錦の直垂
に萌黄白ひの縅緘形打たる甲の緒をしめ金作の太刀
をはき廿四さしたる大中黒の矢負塗籠籐の弓を持
黄河原に成馬の太く逞しきに金覆輪の鞍を置て鐙
ふんばり控へ給ふは天晴大将やと覚えし土居ハ詮さ引さ
がり唐皮威の鎧に頭形錆色三枚甲の緒をしめ武具五寸の
金作の太刀横たへ黒栗毛の馬に梨地に紅葉の葉を浪にて
打たる鞍置三陣に控へ順ひけりその外諸将おとひしの
鎧を着家々の旗指物見えしかなれば次第二坂先陣小の

川通安敵の侍へ宗方兵足軽にて弓鉄炮打かけ手綾接
候ひし一文字に切て懸り面も不振攻戦石黒上山も手抜者あ
またに打取れけれハ石黒上山ハさんざんと引る附山内安並荒手々
懸り通安を或所まで追返し土居打て候取て山内安並
と継を合せて桜井ハ弓手の山へあかり左衛門尉人々南
川中班りけるより四の甚だ一度に横入しけれハ敵ハ
三町余押されさしも元親家老福留隼人桑名太郎左衛門
五百余騎土居を目かけ生けたを引なとこまてに突て如へ係
土居是を見て夫れをなり生け置まじき元親を望むところなりとて
忍しくと入違て降をり火を出し車切に切まくし遠く
見なく責戦ひ大将桑名太郎左衛門郎従非内市郎右衛門
を討取首を取て持上る三の手の井党荒手さ替ら人と馳
付来れば四番の久枝も相續て打て懸りされ之れ清良ハ

元親が被官の勢なれば他の手へも不讓一手を以て息を
もつかせず責立五町ばかり押付けり東小路は青木に陳
取居たりし故遊軍の手をとりむけて敵を押崩し小坂より五
本松へ引退く清良なほ押ゆるよと下知しければ若人六
郎も彦川をさつと打渡し南の山へ追かけ東小路が末子弥
吉十六才なるが逃おくれて引来るを追詰て生捕五本松柏
田寺所を支へ居れども高森には運を開きかけ出る前の
遊軍は一の森を押へ居しかば上城小坂も公廣の旗本に
老成けるが大将大きに悦び清良へ使者を立られ只今一時の
間に勝立戦はさせ老馬は疲れぬは人足も労一の馬とてあ
蒙輝元より賜り今日労苦の為に乗らせては足も労
整られ馬息を休られんには太く逞しき馬或足に
鞭あて引退けり清良悦ひ衆を織て今日の軍兼て虎も

けり因に不遠歌を詠じ彼小笠から旗頭よりかゝる哀
炎の西月と悦び是偏に正八幡氏神三島大明神の法加護
にて全く私の力ならず何とて此三日の間種々の霊験夢
想の告もありしに不違なりし事嬉しさなりと禮拝
偈(渇)仰せられけり

薦木城寄手押拂事

かくて日も漸く刻に下り斜に成ぬれば此勢を以て薦
木城の寄手を押拂へしと土居久枝先陣にて打出けるは薦
家陣が森をさり是を見てかけ出けり西園寺殿は勇ある
いさんで馳つけられけるは薦木の寄手城を巻かゝして武士
が森へ引けるが手に川を中に隔て陣取其日は膳合もせ
蒼しけるが家の伴を方とり夜討をや気たりければ
入まじく陣が森へ蒼方に成て引返しき家公廣をも薦木の

城へ引入諸卒ハ下浄土へ上り明らの軍評定して居たり
而ハ其左の加勢法花津山田南方馳付けれハ西園寺方
弥大勢になりてさ頃ひ夜の明るを俟ち迫て控居
たりける

當家ハ戦を延さるゝ事

其夜因出て南方ハ東越山田法花津ハ中の川へ上り旗本
ハ西の森へ諸勢を廻しけれハ左係出居久枝ハ昨日の會打合と
て後備に加りて福富ハ如何しても旗本を志さしき
人数の内一西の森へ諸勢闘を向ふ鉄炮を打出して
公廣の旗本へ切て懸り鑓を入けれハ高をひとりき前
ぬる也れハ不意を討れて忽ち旗本崩れ下浄土
と三所よりも引退く福富闘を追ひ足早に陣の森へ
引て味方の勢懸合たる所なれハ籔の内たゝ鳥
彼毎らしきこゝ地していさゝかも陣の森へ押寄よとて三
方より切しく責きせれ土佐勢敢て取合さりしかと足軽
共岸の額に出て弓鉄炮打さられけりにて廿四日も暮にけ
けり

土佐勢夜討之事

明れハ廿五日にも當家曾て不取合して其夜味方の役
剃くへ夜討を入て多くの人を討れけれハ公廣様兼
ての外其之事らし然併大将の心にそれハ公廣頃日皆
若年にて血氣の勇をふかりまで少負及になれハ聴しかふり
とかれを勇みに欲を侮りゆふ故に如く家事度々ありきを上
西園寺の近習元面ハ口にて居色聴病なれとも被官と
れよき者有て無なき柄そ乃之と疾む良将の下に弱兵な
く弱将の下に剛兵なしといへとも皆大将の心に有るなり

棧不知方残らて走りなきれ小の川通安中さりを夜前敵
夜討よし若千人を討せさか串は無念之又大将の機嫌也
しの軍せスハいかにといひて南技津山田民部有司出
居七頭ニ合せ三方より突てかかり当家見おろし足
軽を出して少々鑑答せ安並山内を先として逆沢東小路石
黒佐井などニ云究竟の者どもは左右後ろ捻かこみなす人の會尺
に秘く山田民部を突かかりしかいや声を揚て吟叫て公廣
の旗本へ眼目にかかりてまっしくらに懸て西園寺家の侍廿騎斗
引時よりは討取公廣を又六町押付蕨木川の東に旗押立れば
公廣も五本松支へて本陣半に息休きれり七頭の者
ともに號令に人々しれて福富四百余騎にて人ひこ免散るに
味方も二かしるに子なく当る処に福富ハ以前出居か手へ大
し残せんとおもひ出居の手へかかり深浦良鉄当に引付陣

にて鉄炮打交へから出居家の軍立にて突立打立入かへ逆靡足
をもためらはさんとして切崩し福富を山際へ押つくる山にて
桜井奈良吾家さきへ追かくる備はれハ山へもの懸り得ず
しく横きつて中の川へ引返を押詰く深山まで一里の間討かく
とに離兵百五十打取出居無事に打まて勝関を作る当
家無事敵の中にあれハ福富若返毛串もやとて須山を支め
ても頓てかへく六頭無事当家の陣へ打て懸る深田深山一の森の
出佐者ともは是を見てかけ出し公廣の後をとり突かかる深久
枚五十騎にて則時に押返し又一の森へ追上ゐ崩れをとり六
頭当家へかかり事ぞれども少も疑擬せず公廣の旗本へ打
てかかれども多田久枚出居口惜き次第家を欲に破らせ
てハ命生ても詮なしと思ひ切て自身残る所をとり山内安
並をかかり家を見て六頭一度に喚て懸り出佐勢を又

追崩し陣払ひ来へ手へいり何方迄にハよく責参りけれハ其
其大ニハ参まいりの御陣か泰を強て延聖くへ渡り大河を
越て川向ニ屯せしれ伴与勢宴成やとて招き返し退
延吉聖を込其引参り当陣福富隼人ハ熱大将ぶ嶽を捨て
逃くくる和尚ともや思ひ当人下家把とり人吉川といふ雑砕
を倚まり見ル文吉聖ハ一命に加りける其少し当り出居京郎
其岩熊ニ陣をとれハ西園寺家の侍を外其のぐわし百の
森ニ其集りける

一 鉄炮之扇子の的を打事

此日我菅方より弓を車油を落し当れを河水能載滴きり
廿七日ニ其歎味方おく一議き外の事々両日ニ欠しとく
居をりしか半刻計之金の空の西ニ入出るく伴与勢を招く
我見れハ扇を作さきを立て是我射をとめ志かと之を

間一町四五反をやゝ隔て人川音高く当れハ去れと云葉ハ聞へかゝり
さし出扇を見ぬひて矢枝をめされ何れ其いつれと罷
られ当れハ久枝畏て射ととの事ニて此よし味方ニ向
きしかれ多くはへとルハ毎しへ矢島ニて那須の与一か仕
しけるハ七八反をへだてたる中傍へハ見と遥ニ遠く其丁四
五反程ニル見へきハへと弓ニても叶ふへからさ然れハ
鉄炮ならて其誰成ハ志かゝりハ鉄炮の手当れを出居家中
我誠くて可仕との見覚へ不申ハ彼か手持者ニもえ其每度
遠き敵を打落し又黒瀬の郎ニて四軍ニル頭中の武士
ニル清良ニ冴其者ルハ其さらハとて清良く使を立
られける清良再三辞し申されしかと是非に及ハとて而
有ければハ出居左京進人家中我撰りえ
るへしとて何迄をわら我ニ常さ寺ニ仕かとて心悩

あたるまて切ヽ仕つけ中をのなりて無危く為す先勘助
助五良甚内十發鉄炮之外なと無射中度ヽ手柄を顕し儀
迄さん者ニて此者中ニ而致炮之外可相と其存候れハと
申せはさしハ彼をよべとて情良如くと申され〆る鉄炮
之外中りの無さんハ小風つよく吹て此の日玉付を覚来
ハへとん候を背へき尤〆も此ニ而併心定仕候ときて請
合雑中事ニハ若仕損しねりても候ニて陥其くハ家へし
者りしハ此川を游紙扇立てる者と引組指ちりへる死去
此旅の際ハ勝を切取りかのるをもりし今生の暇乞
と東存ハ各々遁とて何歳ク暇乞し立ち山際其里りかし
小高き所くおも上りて常れハ味方の勢無各片津を呑て是
を見れハ敵陣ニ無立並ひ噪歎ニて見物ハ鉄炮之外ヽ黒
皮威しの胴丸ニ鎖小手引ちヽ赤銅作りの太刀をさヽ昆

沙門腨当引去免まさ覚へさら鉄炮を左の肩ニうちかけ
火縄二口ニ火を付川端ニおも立扇ひ通さ見居りさら有さ
海ち天岐仕候りて見へくろり玉木も川水ニて嗽ぎ洗
心中ニ祈念し南無三島大明神と一度玉の踏ふましめぬ
へとて火縄の灰吹きりし火挾ニ去りとをさゝ火蓋を切去
去りしため息合程よくやうりと打つ音とりもやく立ち家扇
るもりまとかへり小風ニ靡き龍まハ敵味方一度ニ咄と讃
る声凡の音は水の響ニ交る去ましハおりしも去つまらん
敵ニ無鎌宣積を為へき梢を打て仕為りや若をんおく
りや侍与侍と声々ニ讃嘆る味方ニ付鯨波を二度揚て
去る為へくとを招きりる公磨何不斜ひ為ひ彼者よへ
とて召連御前ニ跪き畏る公廣汝今日よりゝ馬ニ乗へし
とて系迄の給る一足振り領地をも宛り々退出し常凡ハ

近習并招の武士と九兵を置て眞加ニ叶ふに玉木哉とて
うし給ひけるを送りける時の面目手柄のかくるやふ
つきたりなりけりと是を賞しけれ爭にて加く原ノ手際仕くし
人ニは天下にも名を顕はしつきニ依田金の戰なれハ面柱
誉さん計なりと心有きつて打寄り情きる事と誉中ケ已
者も空ハ足煙なりし後心をせ有とへなれハ三年以
前より侍ニなり情良か智ニ依りされハれとしいまい若
行武者にて馬の鞍のぐさりハ西園寺殿より已日以
馬上路鎮気の生に成しゆる矢取をも眞加なり加ゆ
不ニ堂家々より使者有て扇手の的の手柄をおほえ深
田の玉義人質と土居へ生捕し東小路弥吉と取りへいくへ
し相滿水ハいまい深田れまを後上家把まて双方引く
一一の森ニ戰し玉佐勢玉助て城を明させ陥せハ深田玉

義又分の大とく城を取て玉廣の手ニ属けれハ苦家
ル諸勢を引具し玉州へ分くられ西園寺殿ハ陥陣なる是
ル鉄炮之外ハ手柄ニて此度の軍ハやと双方人質虜取む
へ兵ニ陥陣なりしと覚へて弥高名類なし梅ケ度味方へ
打取首級雑兵合て三百九十六内武百十人土居の手へ討
元ヲ元親勢を土居より如く思ひ入て情を出し先けニ戰
ひし五ヒ内百九十は福冨菜名の手ニて打取りカ何な
る事ニ情良は元親を憤り思召れしに以前氏を打殺
しとて又福冨を退掛ひて上泉名太郎左衛門を討取毒八大
学之と情良別して哀限りなし

情良西川四郎左衛門と騒押之事付合戰之支

土居情良と西川四郎左衛門不和なりしも根を為ぬ
此時黒瀬殿へ諸大将を餐饌なり酩酊の何まりに若侍

打家盤持腕押捻ミの負ニ宗しきり家ニ河東捌法忠の被
官筋目芝氏伊守常氏ハ智恵有覚人ニ勝まさし者なり彼
か三男源五郎後ニは四郎左衛門と云し主人法忠の詞ニ
付て黒徽殿へ出仕せしハ此男長六尺三寸有て力量人
ニ秀れハ此座まて彼をと是をハ押付祐か付三十人斗
の相手の内ある手か付るハ叶侍る人とあらさりましハ皆大
咲ニ成負て其引ニまきし扨負方より是ニ何それ南方の
年令廿若くハ芝ハかるとしそのをと云ぜれハ芝ゆる敵
手かハ下せ者酒様の為ニにか一と心さのミ強ル不雑ル天
晴曽我の五郎ニてと其外ハ雑成ましねをせとらし腕押
ニは未手ハ付させ十是ル恐ルへしとは不存と為時道後
侍居をい其内之室中ハしと莱言しか承為辨ハ古俣野か
異理まての相撲をかくやと覚へしりかる並ある字ニ黒徽

殿雅ある久枝真綱情良へ中ル承ハ先程より各勝負を分ルを
若手ニハ出居殿計ありて子を行ハれ之ハ一座の奥を為
く成中ハ是ある其頃の拳と代ら人ある事へまいあふハ必名
ニハ是非一手押合て諸人の不審をと遣し亮人の目をと
覚させ給へと云れハ広く尤ルもかにしと進めのふにも
りハ中く叶ふへく存まさと公不仕之へハ不真ニハ負ハと
く各ニ笑すせ中さんとて手ニ片膚脱て勢りかり情良ル
長ハ六尺五寸有て芝さ満さり多ルと心いまた壮年ニて是
ハ只一筋骨組太さまりまて肉おし芝ハ年増りの男盛
を筋骨諸肉ふくれ上ハ升を立さりとく力瘤堅く立さ
満しきる茨木童子か綱ありきよれハ腕を字さ然さけり
其怖る敵人共ニと取組血眼を見出し喰しく形勢恐西
の八郎か鬼と論ひしもかくやと思ふまかりし庭ニ皆ま

に勝負なりしかいつて志らるゝ人芝は終に押負さり
芝面目なく思ひ乍ら帰にやさしも何れ出居敷は肘を揚られ
さるにより勝出し肘さへ付て押出なば一手を叶ひせし
を以ふ情良をとかくそふ志らてしなし嘱居さりし故芝が
悔り是いさ押出し申さんとて瀾客是非にと以ふ情良大
方彼が力の程も奥床しうしてとや思ひけん幾度押しやも
も只今の孫にても無覚束とも数人と押合定て学外に
てをらぬん覚ての勝負にいさゝへしと何れも芝是非にと
承知申すにも又取組て押れ共も又芝負さるる
此時を臂たりしくと以ふ事を後碁盤の上にて押れ共
とも負けれは是非にても心元なしとて以ひ碁盤抔出し
手足の上に双方の肘抔のせて押せとも実度ル芝負て
一度もやさしく事も数ヶ度押ル共にも膝学外事なり

ゆへにや又酒に酔て気揚り無正躰なへかへ元来力多き人なれ
るゝとかく矢へかゝしゝが情良も打咲て本の座に出
りしは奥さ気若き故そゑゝにかり芝も本座に付て云ん
るは情良弐頃る矢場也も威近国迄ゆるとまで定まる
候にと臂を揚て仕勝まれんと以ひけれは情良迄て
手像にては世話に人の威勢とは臂を張と申せも其を肘
をいからかしゝと返答に芝又肘を揚ても張て相手に寄へ
し追て時節抔見合せ度ものと一番勝負抔致し申さん人と色
をかへて云時情良と若く短気なれは乗て芝なとさゝやき
には臂迄ル不入擬先にて警答ふ中とかく肘に来い鋸服を
り出雑談左様の事など話ひそ今日は枕奥まで大きに以へ
各酔を醒られさぬらんいさとて又盃呈り小児性なる時
勢ると強をせも座の事なく各退散し事する四郎右衛門

於こゝて意趣口惜く思ひし兄の一角左京進古人残らさらん
己か手勢五十余騎加勢として百騎計にて翌年正月廿日
年々の例に勝福寺表へ寄来り鯨波を三度上け家太泰に是具
足祝ひとて上下共に酒宴してありける是を見て彼是偽
にとりての只今寄来り候人といへとも傍にハ但州一黨
と河原渕法忠被官の節目何れも一条家になりし者共
つゝめと以ふ者共とも同し事なり族も有しか清良是を聞て
や件の腕押の意趣なるへしと心得て彼のかすなる
まれ者共にと下知せられれハ打出て日鏃立なく孟
さる具足残る人と思ひたるも小袴の欲に具足も及さしと
いふ者なれとつや〳〵有らぬ日の旗おれとも目ざさしと
て取て肩になおりけ上帯引しめ太刀打をもって出るを有
思ひくに我先にと山の尾松宗をりおりて下く足軽と鉄炮打

手下分も死て従弟
みづから主馬と名り
名を奪ひそれ
とし

かけし先向ふ男ぞ男きとのハ下たちに行て孫を何り河
係も一番にかけ合せ勝福寺表を只一まくりに追ちらし欲
川を渡りあれも土居勢の中より叔只今も何の用に是へ
も便おはそを誘くと云ふ所へ掛りぬと云かけられ也く河
用にかうて鉄炮肩越に立く四郎右衛門兄弟自分強ク
て取る間に一人で河係を縫にて突き然里縫下にて首二ッ
とる主馬をを追つてまく首一ッ取給りて左与衛花人責
然し首十一取て下撥婆の上州覚寺の棲原へ追入らり寝
さ皆家ささと云しも土居の侍なりし故清良の時討死
しそ子に九郎と云く未幼稚なりしに是りつく主馬か子を以
十年余り彼の陣代に立牛之丞か子に次郎と云しも九郎に一
ツの年増なりし十四歳より手柄を顕さぬくし牛奪かれハ
それ筋目なれも九郎つみに主馬に譲り

次第ハ牛之介てあれとても我行
此の旅おこしを深く悼として

於こそ意趣口惜く思ひし兄の一角左京進安人殺さるゝ
己か手勢五十余騎加勢として百騎計にて翌年正月廿日
年之初に勝福寺表へ寄来り難波も三騎上家太泰に具
足祝ひとて上下共に酒宴して有けるか是を見て彼は何
にとりて只今寄来りけるそと人々いへは侍に八代卅一黨
は河原渕法忠被官の節目何れも一条家になりし古老に
つとめ以ふ者にとて同し者か族も有しか清良はかねて
や件の腕押の意趣なるへしと心得て彼のかすなるへし
此れ者ともを下知せられれは我等七日餝立なくへ至
きぬ具足残忍とさはられ神の歓に具足も及ひしと
以ふ者なれはいやいや尚若の七日の祝なれは目出度しと
て取て肩にかけ上帯引しめ太刀打もちて出るも有
思ひくに我先にと此の尾松宗とりおりて下く是程は鉄炮打

かけし處向ふ男とあきとの八下をもに行て徐を何かに
徐は一番にかけ合せ勝福寺表を只一まくりに返さんと欲
川を渡りあれは土居勢の中より叔父今は何の用に是へ
と問けれは是を聞くと己の郎か抱りかゝると云かけられ是を清
用にいそて鉄炮弱殺に立て四郎右衛門兄弟自身討
て取るか一人は何徐を残りて実を鍬を残り下にて首二ッ
とり主馬を追て其首一ッ取返りて左右清範人責
戦ひ首十一取て下撫城の上野覚寺の林原へ追入られ宴
き苦家主なると云しは土居の侍なりし故清良の時討死
しそ子に九郎と云る未幼稚なるにより主馬か手を取
十年余り彼の陣代に立牛之丞か子に次郎と云しは九郎に一
ッの年増にて十四才より手柄を顕せしかく牛尊と云れは
其節目なれは九郎へ
次郎口惜とて

手の分も取て従兄
みつからに馬にあり
仕と為を奪ひしもの

西の川へ立のき今度同しく来寄てありしかいらず土居の構
流岩家臣馬よりなにそ我と思ん人は是へおられよとて
只一騎かけ出て招へたり土居方より我もと進み出て家
中ゟ各は我もと川の中へ彼は似せたる之某々其真の岩家臣
るかそとくかけお手を聴なく見渡あふなと云捨寿臣馬
寄合火花を散し切合あ家の双方数く廿四五歳の男なるか
歎味方を手を私て宮臣晴と戦ふけるにいさゝか臆せす
勝負せんとしけれハきれ人まふとかふまいむまと綱付たる寿臣馬
の腎仁どもしと落ちるよう成りさまにて馬の首代取て出
土居方より芝是残見て口惜くとや思ひけん何さき進のかすなと
てかけお土居方より土臣馬かけたなりてかけ出けり我へ
は今度も芝土真人あまたうたせ四郎右衛門頭をも見せ
しるく引返く土居方よりはいかにも芝敵首を何まらて引お物

ましてゐかれける義もなくて俄に出てきたりけれは方より八幡
人ハ討負けれは生侍出産ありて土居方へ討死ハ首まてを餞別
ま迄して中城主を対面ありさて以論ひかゝりなとをも
ありけれとも叶わて以来きして退引ありけり土居勢詰を出
らひ追かけれは清良副しかとも見て呼ハりて大勢にせよ
とて首を集めけれは廿七打取四郎右衛門落延ぬさきに
と云て勝関を上て引揚けり

土居方より西ノ川へ押寄る事

同二月三日右の注進ありて是不可叶とて土居新左衛門
秋先陣にて相従ふ侍には土居左京亮同名人同右京進川
添主左衛門岩家六郎兵衛を外五郎の侍都合雑兵八百余
人西ノ川へ打向ふ芝四郎右衛門は病気と号して不出合ニ
外数百人をわさく討れはの程隠して事や何れ死とハ城

中へ攻入扉ミゝ手ル向ハされけ足まて向ひて後日此證據ニ
とゝく城下の在家三於燒崩してを取り帯候を後芝ヲ云
帯候ハ清良向まり侮て勢を取り指向自身不出向ひ立って
病氣と号し不出合さりしと也て左足て又同月廿七
日ニ清良百五十騎相具して西の川へ押寄去ハ此夜も又
四郎左衛門おとしゝ城より鉄炮をうちかけて引籠居らゝ
是れハ兼ての約ニも似ぬ臆病者ぬる三家の外も返て臆
病共と也ことり一時ニ城を踏崩し城下の在家一宇も不殘
悉く燒拂ふへけれとも元来味方ニまて同士軍の事なれ
只今不のゝの大敵を引請國を諍ふ時節なれ候小事ニ心力を
盡しても無詮いさゝかも隔らん以来口説の事難成ものべ
し後日ニ物るいひそとゐさりして打隔り乃家を後四郎
右衛門ともにさ乃ま不成して打返されたとも常ニ中悪き族

と黒瀬殿氣つかひ有て免となり候先和睦させさせ其の以
後清良の帰去居和記と申せし人四郎右衛門聟させ候
へしと西園寺殿さ於候へ共指有しゝとも此芝ヶ表裏有男
ニて未し謀叛ありと仕かんを附させ彼と安易り事成ま
し自縁返る儀不存安事とて終さ承引なく其ニ一代不和
ニてそゝ其ニ盡しける

豊後勢引拂事付家門清良對陣之事

同年四月中旬豊後より千余騎押渡り宇和保内へ打上り
在々所々の麦を苅取て私ニ積船中まて搬乗り也勢の中
より土持丹後と名乗る久枝弘路を某伯父の敵之一陣可
仕と其嘆りける子息某綱あまりぬ若武者ニて心得ずり
とゐまゝ其従七十余騎ニて乃弟某綱黒ニ打てかゝり候出打
侍りけ一揆二揆ともゝ帯家ハ某綱ニ切立て且珠の子を

さる程に汁はく四方へ乞川と返らし這々迯て舟に取
乗沖に出家臣綱是を欲向まく討た勇ミを可して悔りける
然れとりして彼船とも三浦九郎板島にうりて又麦代刈
取立間石城へも寄と出ニあれを城主土居似水立戸尻
の濱へ打出搔楯をうき支へんか欲大勢なれを城へ引
兵牛に遠矢計射て毎めらひあ吟雲へ清良奈良落木有る
五百余騎にて知永立石尻の峯より責下り乍押付追拂ひ
あれハ欲一戦をせんとして皆舟に乗漕出し遥の沖に漕て
居あ事の彼風何く岩なりて毎まり将兵共後をさして引
返し後に是を出先に土州より加勢に頼まま遣し渡りしかとも
相図に遠し土佐勢一騎を打無是ハいかなる事そといへハ
当家は既病氣にて於馬なくりしに依て豊後勢を引拂て
悔りしとなり其後四月末に当家は出陣有て打向ひける

と出へしれれハ然て清良出向ひ桜谷をそ支あり家門も中
家地に陣を取五月四日まて十一日か間牛に對陣し一筆
れにれ是ハ戦人ともせんとしてと当家又土州へ引かれしかハ
ハ清良も陶陣せり是ハ先日豊後勢渡し時病氣にて未
圖ま遠し於馬なかりしゆへ重て尾合せの為とりける是
出へし頃日無土州にて当家御をむかし共たとく院家門
とい望中等條

上山彦右衛門唐木三河守戦之事

同六月廿九日上山彦右衛門ハ三百余人引具し夜を籠て
唐木へ来り城下の民家の早稲を苅取る三河守侍三十
余騎稲盗人なりとて披え迄て懸りさんくに打合けれハ
上山かもの和ともり群出寛竟の者とも上山が前後左右
に立並重宗方武山際へ三度まて押付つゝ重宗是を

見て城中より切て出上山に戻し所ひ黒烟を揚て攻戦
ふ深田より呼つけ公義も鉄つけ寄ぬ故上山が痛くなりて
つきはくり／＼も深田不叶して小坂の方へ後出居
ありと善家様井蔵出居弛付荻右衛門を無雑退ヶ下
奥野の山際を押けるに首九ッ打充坂口にて指
関を揚てありしが此時荻右衛門より深田公義に落首
を書て立に帯り

法不しらぬ深田の中に清不免して
称この称ひとつさてな狸ら

深田は竹林院寺にて法不の末なりといひしかば法不を出
せと望り出し放小しらかさるると笑ふけると謂なり
[illegible]

善家六郎兵衛喧嘩之事

去程に去宛の者とも上山を追ちらしくる當家中に善家六
郎兵衛ハ養父の者らしき者ともを見まかんとて深田へ
奈まハせし處に荻右衛門か立重ある歌を見てさても深田
衆ハあしくも聴せられて歌に笑されたふ所の荻右衛門か
ときの侍いらに手前帰路帯なりとても軍はすゝまて
者かに思はれに追ちらさるとは浅ましきあれさるにもか
りかくそてし歌の返しをと見るへしと高声に笑ひあれハ當
か内河原治部柏木なと申ていかに六郎兵衛手前情ハ良
の手すてりそ口たきけいあしいへと我木を皆儀申まて
毎度の軍に立合て手の働をせし家事かと只こにい
へと六郎兵衛さハつゝいて毎度立合ても善家いつか
おくれしそ柏木か云先年其後との責合中山の陣にな
其方一番に逃られしハいかにと以ふ六郎兵衛いかにも

その時ハ且十騎にて我れ先になり欲ふ子に何事にも迯て
り迯なりしを返し合て首ニツ取りしも叶ふ方さして又公
義ハ此時も玄蕃を不待付して我城へさく迯入る事叶はす河
原閣へハなそ落られしそや是此時玄蕃をも城を
ふまへて終に拾ひまゐを志され終家を其方遁それを姉
こりく某従譜代因の家をのきしハ公義の私之情良ハ継欲
千万騎有ても味方砦向へもそれを敵ひて後諸なりそれ
也一人の騎に一騎を打向ふ之強将の下に弱兵なしと云家
なるそ穿鑿なる家に居られさるによりて皆私哉ハ方
に負るゝと云柏木氣色を見て事ハ我思ひて今日玄蕃悪不
の心根なかぬ事の力にをりけんと云ハ一の森へ上りて侯を
何ともしてさゝへよとすらひきれき人と毎人の写ニ入立入
押隅柏木河原ハの一りいかゝ出ニ公義へかくの次第哉

農商務省

諸の公義ゆて悪き善家先の云廻りなる内に彼にハ意
趣有さしハ武士を陀らそしく打と哉彼に我被官筋目
有者なるにかく欺迄ても依る一きへきなる我なると以後
の思案もなく云ふされ事の名第て彼を精全も必なきへハ
混甲六七十雑兵二百てり名りと云ふ不の簇隠さ待かゝ
家六ふ玄蕃とくたの氣色を見て笑ひ相ニ是勢を上ケ
出されなハりゝ御存ハせりまゝ一物を尽しなさ味方
うちに義勢ぞても無益成事ゟ手ゟ去度哉立さうらへり
なるハ迯るかへりしとハいらんハ疑なしかゝらハ打ちらし
て通らんるいと安しとてね返ふものとハ五十余騎先に
押立ずもれなくして小歎るとうちそうして行ハれハ待
居たり若ともいさなるをより向ふ小さ陣にハかゝ里得を矢一筋
こにも射かさて薮ゟけや陽川居こりまゝのりから六ふ玄蕃

農商務省

を座ゟ退してかへせやと罵りけり何事の由有やといふ
ふまゝおのゝ門とゟ下知せられしも其勢ニ僻易し
一の森へかけのかれ混て退かけられとも城中へ逃込木
戸被閉挾間ゟ鉄炮を打出しける時ニ奈良橋
津守ハ其貌落水ニ軍何りし少ておおて只今隔りしか善
家の旗指物を見て是ハ如何成事かや怨付れし土居ニて
何者かもやあさゝ事ん六郎兵衛ハ深田ニて討まいり
と少て一勝かけニ此付夜中ニ此城を既ニ攻落しへき
と覚えこゝを佛言寺の僧出合てさ候ニ錯ひかけ且
うるさく事しくゟ左京兵部計焼まいらく遣ての
拵なれハ公義弥欲味方ニ秘をあきられぬとり批判
せり翌日清良ゟ深田へ使者を以六郎兵衛推参仕
勘當せしむへきよし云送られ本家を佛言寺又元披露段

ニも及へからぬとて猶ニルゟ人ハ三寸の舌を以て五尺
の身を覆(クツガヘス)といへとも我一人のこゝ何まてゝの人を懶ニ
只一言より事起まゝる可慎ゝゝ又無詮儀なる家ニも必楚
忽の事不慮ニ出来る物也是首将用意のなん所也

桜井武蔵敵の策を見知事

同七月下旬土山下山安人一条殿へ申けるハ當年ハ菱沼
ありけ今至まて雨降つゝき山谷ひの作毛なしく民頭の土
民既ニ飢ニ及へき躰ニハ何まて成とも大将を仰付られハ
ニおゐても伊与ニ打へ馳向冬春迄の兵粮を奪取へきよし
申けれとも清良聞て依岡石黒古山三人を大将として彼
是都合五百余騎ニて打向ふとりへしかハ伊与ニての彼
等ニ侮られ河原渕深田中野三人のかへ馳ゆくを迄西
園寺殿は心一ツまて毎度軍ニきいハのつゝさ承まいりて

之令度此者皆も我のつしなハ以来弥勝子京へ〻とて清良
陣ゟ森へ向さと小人数を出し五十余騎にて係りけれ共
寺山是我少去居小勢を出し寄る〻我こを直下に見るゟ
怖りき〻謀成し〻と不審して乞食の躰を抱えを仕立様
子を窺ふ桜井ハ川端に下りて手水遣ひて居さりしゟ
彼乞食我見知て則搦取て拷問し尋れ〻有の儘に白状
を桜井労て此ものの白状を〻ゟ一命を助へし去なから
かく少人数にて出向ひ無〻なと侮りていまゝ欲に悔ふ
事へし先軍終て後にそ首刎るもたし殺さへきさとの
寄ゟ旅を捆して縦ゟるなゟれ又緩くして再ゟ去なとらく
番を付て守ゟ置ゟ処子て首差に也さと油断し縄ぬけを
させて逃しゟ案の定く此をし欲に告寄りと見へて翌
日寺山先手にて松丸次郎丸へ寄来るに此所ハ法忠領なれ

無作を我不毀して先手無中の川より芝村永堅市へいらん
とす奈良桜津留〻此謀をハ不知清良本陣と少く馳来り
しゟ去作の先手に行合石黒にて四ゟ里 則時に押崩し
次郎丸へ詰寄之れハ清良相当な遠して山ここ隠し遣ゟ無
事人数出さゟ子奈良桜井二手にて終百に〻さゟ無をを
をつゟく去作勢の五百余騎を一里余ゟ押付深山を登支ゟ
ゟ一寺年〻かくなりき働をそれとも少を危ゟぬ子西
園寺殿去居へ心我宣れてや又延こなゟ心底にや清良我
大将とは有なゟぬ諸方去居の侍子を雄成旗印の下知緩
やゟなゟ子をゟて欲をを不懲叢にあゟなゟへしと悔こゟ
かくて深山に三日支〻れとも欲ゟへし来ゟさ〻れハ雑兵
の首廿一取計にて桜井ハ又陣ゟ森を望そさく他毛取納
ゟ遠ゟ軽ゟ番を付乞年を無雑仕舞欲にハ一粒も

やぶれさ里ハ

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan